

「ぬれぎぬ問題」再考¹

久 松 太 郎

- I プロローグ
- II ぬれぎぬ問題と交易条件
- III リカード『原理』
- IV ミル「植民地論」
- V リカード「マルサス評注」
- VI ミル『綱要』
- VII エピローグ

ルソーがヒューム氏に打ち明け、ヒューム氏からさらにバーク氏へと伝わった話によると、ルソーがその著作物の中で人の注意を惹くために利用した秘訣とは、逆説を用いることだったという。一見すると不条理に見えるように表現されている命題であっても、ある程度の推論と説明とを加えることで、真理の様相を呈してくる場合、未熟な読者は概して、不思議なほど大喜びし、最も創意工夫に富んだ人であるかのようにその著者を褒め称え、意外な発見に歓喜するものである。

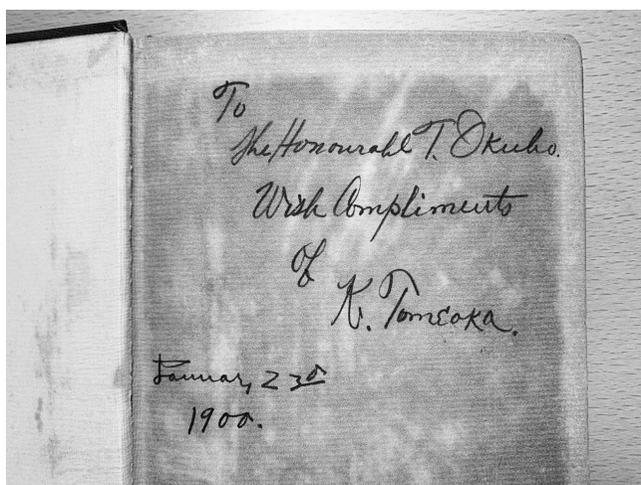
——ジェームズ・ミル『商業擁護論』（1808年）²

I プロローグ

京都の^{ただす}糺の森では例年8月中旬に下鴨納涼古本まつりが開催される。2021年のこのイベントにおいて、筆者は3冊500円のワゴンセールの中に古びた1冊の洋書を見つけ購入した。それは、宗教家兼犯罪学者ウィリアム・モリソン（William Douglas Morrison, 1852-1943）が著した『犯罪とその原因』（Morrison 1891）という書物である（Robin 1964）。表紙をめくった先には、おそらく最初の購入者と思われる人物の名前と、その人物がこれを別の人物に贈ったことを示す、次の言葉が添えられている。「T・オオクボ様へ。K・トメオカより謹呈。1900年1月23日^[?]」（写真1）。この古書は、書物の属性や時期から判断して、同志社英学校の卒業生で当時内務省にいた留岡幸助

-
- 1 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（A）17H00982）による研究成果を一部含んでいる。本稿の英語論題は、Viner（1937: 444）に依拠している。
 - 2 Mill（1808: v-iv／訳5）。ルソー（Jean-Jacques Rousseau, 1712-78）、ヒューム（David Hume, 1711-76）、バーク（Edmund Burke, 1729/30-97）。たとえば、ヒュームは、『政治論集』所収の「公信用」において、逆説を用いた説明を与えている（Hume 1752: 126）。本稿で利用した訳書については、必ずしもその訳に従っていない。また、引用文中の〔 〕は筆者による補足、傍点は原文イタリックである。

写真1 本に書かれた署名



注) モリソン『犯罪と其原因』(1891年): 個人所蔵本より。

(1864-1934) が米国留学経験もあり内務省監獄局長も務めていた大久保利武 (1865-1943; 大久保利通の三男) に贈ったものと推察される³。この推測が正しければ、この古書が留岡と大久保との学問的関係性を探る1つの手掛かりとなるだろう。それは、古書収集がもたらしうる思わぬ副産物である。とはいえ、その真偽を確かめることは本稿の仕事ではない。出版物への手筆の書き込みが知られざる歴史の闡明へと繋がりうることを示すひとつのエピソードとして、これに言及したにすぎない。

本稿では、原典の理論分析とともに、往復書簡や草稿、手筆の走書きなどの史料を利用することによって、古典派貿易理論史上における不可解なリカード (David Ricardo, 1772-1823) への「ぬれぎぬ問題」が再考される⁴。リカードは、1817年の『経済学および課税の原理』(以下、『原理』と略記)の外国貿易の章で提示された有名な2国2財1要素モデルにおいて、貿易利益の2国間分割を適切に論じていた (Ricardo 1951-73, I: 135/訳157)。にもかかわらず、数十年後、彼の議論は、一方の国が貿易利益を独占しておきながら他方の国もそれを取っ得できる——いわば、貿易利益の二重独占——という何とも不可解な読み方をされてしまったのである。リカードにはこのような「見落とし」があったと主張したのは、ジョン・ステュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-

3 井上 (1975) によると、「犯罪の減少をはかり、犯罪者を救済するためには、幼少年時代の教化こそ重要であることを悟った彼〔留岡〕は、非行少年教護の研究のために渡米留学し、マサチューセッツ州のコンコルド感化監獄やニューヨーク州のエルマイラ感化監獄で親しく理論と実践を学び、帰国後、明治三二年〔1899年〕に東京巣鴨に「家庭学校」を創設し、少年教護事業の実践を進める一方、内務省囑託として、広く地域社会の改良を手がけ、啓蒙活動を行なった」(117)という。また、人物と日付の推定が正しければ、この書物の贈呈時期は大久保の監獄局長更迭時期 (倉持 2012: 104) とほぼ重なる。

4 ぬれぎぬ問題については、Viner (1937: 444-46/訳428-29)、行沢 (1974: 44-45; 1978: 221)、吉信 (1991: 94-105)、田淵 (2006: 95-97)、田淵・久松 (2018: 13) を参照。

73；以下，ジョン・ミルと呼ぶ）である（Mill 1844: 5-7）。彼によれば，自身の父ジェームズ・ミル（James Mill, 1773-1836；以下，ミルと呼ぶ）もその『経済学綱要』（以下，『綱要』と略記）の第1版（Mill 1821）と第2版（*ibid.*: 1824）で同様の間違いを犯しており，その誤りは第3版（*ibid.*: 1826）で修正されたという。『綱要』の第1・2版では確かに誤読されそうな貿易利益論が展開されており（久松 2022 b: 76-88），それが第3版において修正されたのも事実である。だとすれば，ミルにこそ罪があるはずである。なぜリカードが無実の罪が着せられることになったのか。彼が「デイヴィッド・リカードの4つの魔法の数字の本当の意味」（Maneschi 2004）を理解できなかったことはその一因だろうが，原因はこれだけではないようだ。この原因が生まれた真相に理論と史料を駆使して迫ることが本稿の主たる目的であり，本研究は，いわばリカードの冤罪とその原因を再考する試みである⁵。

使用される史料は，幸いなことにすべて活字化されおり，われわれはそれらを出版物の形態で容易に読むことができる。その大部分は，リカードが彼の友人たちと交わした手紙であり，これらはすべて，ピエロ・スラッファ（Piero Sraffa, 1898-1983）が中心となって編集した『リカード全集』（Ricardo 1951-73）に収録されている。1930年に王立^{ロイヤル・}経済^{エコノミック・ソサイエティ}学会によって彼に委任されたこの編集作業は，その最初の刊行までに実に20年を超える年月を要したが，この子細な仕事はリカード研究における目まぐるしい進展をもたらした（松本 2021: 60）。また，この編集の途上でスラッファが古書収集に目覚めたことが知られている（*ibid.*: 113）。戦時中の日本国債への投機で得た利益がその購入資金となった彼の稀覯書コレクションの中には，のちに貿易理論史を覆す大発見と目される匿名論者の小冊子『外国産穀物の輸入に関する諸考察』（Anon. 1814）が含まれていた（de Vivo 2014: XLII, 102-3）。1814年出版のこの小冊子では比較優位の2国2財モデルが展開されており（Anon. 1814: 9），それはリカードの『原理』に先鞭をつけたと考えられている（de Vivo 2000: xviii-xix; *ibid.* 2010: 101; Grančay and Grančay 2015: 71; 久松 2016 a: 91-93; Maneschi 2017: 34-36）。これもまた古書収集の副産物であった。

IIでは，ぬれぎぬ問題を交易条件に関する理論的観点から整理しておく。ここでは，国際経済学の教科書で馴染みのある2国2財のリカード・モデル（the 2×2 Ricardian model⁶）を使いながら，両国に貿易利益が発生する場合と一方の国だけがそれを取得す

5 ジェームズ・ペニンントン（James Pennington, 1777-1862）はミル『綱要』第1版の貿易利益論を批判した（Pennington 1840: 40-43）が，これについてトレنز（Robert Torrens, 1780?-1864）の『穀物貿易論』第4版には次のような序文がある。「貨幣の素材が外国産物からなる場合に貨幣価値を定める諸原理を研究するにあたって，私は，リカード氏とミル氏が進めてきた本課題に関わるいくつかの学説に対して，ペニンントン氏がきわめて入念かつ厳密に行った批判から多くの助けを得た」（Torrens 1827: Advertisement for the Fourth Edition）。のちにジョン・ミルがこの序文を曲解し，自らの1844年の著書の中に取り込んだという解釈はできなくもない。だがそのためには，ジョン・ミルがこの序文を読んだことを示す証拠が必要である。

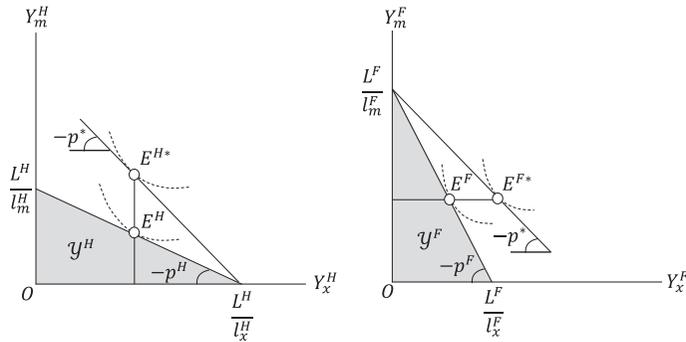
6 たとえば，Krugman, Obstfeld and Melitz（2018: Chapter 3）を参照。

る場合とを図解を交えて説明する。後者の場合に至る交易条件の決定は、相対需給理論による教科書的図解と相互需要説による古典的図解の両方からなされる。とりわけ、相互需要説については、久松 (2022 b) によるウィリアム・エリス (William Ellis, 1800-81) の貿易理論解釈を拡張させて議論したところに特色がある。

問題の真相へと迫るには、リカード『原理』とミル『綱要』の成立から出版に至るまでの経緯を丹念に辿る必要がある。というのも、この経緯のうちにリカードが無実の罪を着せられるに至った原因があると考えられるからである。また、その間 (1817~21年) に公刊されたミルの論文「植民地論」(Mill 1818) と、トーマス・ロバート・マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) の『経済学原理』(Malthus 1820) を評したリカードの原稿 (Ricardo 1951-73, II; 以下, 「マルサス評注」と略記) にも触れておかなばならない。なぜなら、前者には貿易利益の分割に関する適切な記述が、後者には、見方によっては一国の利益独占という誤った帰結を導きかねない議論が存在するからである。Ⅲ~Ⅵでは、リカード『原理』, ミル「植民地論」, リカード「マルサス評注」, ミル『綱要』の各著作物の執筆と出版の背景や事情が各種史料を通じて明らかにされる。

比較優位モデルでは、Ⅱで詳述されるように、自国が相手国の国内価格で貿易する場合、自国の貿易利益独占が発生する。Faccarello (2022: 74) で指摘されているように、リカード『原理』には、一方の国の自然価格で貿易が行われる数値例が存在する。Ⅲでは、この例についての2つの理論的な読み方が提示される。Ⅳでは、ミル「植民地論」の貿易に関する議論がどの範囲でリカード『原理』に依拠しているのかが明らかにされる。「マルサス評注」には、ある国が相手国の自然価格ないし生産費で貿易することを例示したリカード注が存在するが、Ⅴでは、ミルがこれに注目していたことが指摘される。「マルサス評注」の完成後に出版された『綱要』については、次のような憶測が飛び交ったことがある。『綱要』は、息子ジョン・ミルの下原稿に父ミルが手を加えた共著であり、(父が校正段階で見抜けなかった) 貿易利益論において息子が犯した第1・2版での瑕疵を第3版で修正したのは息子自身だったのではないかというものである (Thweatt 1987: 38; Maneschi 1988: 108)。Ⅵでは、『綱要』執筆における父子の関係が明らかにされ、その執筆の前段において父ミルが、ある国が相手国の自然価格で貿易するというリカードの主張に気づき、それを比較生産費説と安易に結び付けてしまった可能性が指摘される。Ⅶでは、Ⅲ~Ⅵを整理した上で、リカードに無実の罪が着せられてしまった原因を指摘する。

図 1.1 両国に貿易利益が発生する場合 ($p^H < p^* < p^F$)



II ぬれぎぬ問題と交易条件

まずは貿易利益の二重独占とは何かを、2国2財のいわゆるリカード・モデル⁷で考えておこう。経済は、国 $j \in \{H, F\}$ 、労働のみを生産要素とする財 $i \in \{x, m\}$ で構成される。 j 国内で i 財 1 単位の生産に必要とされる労働量 $l_i^j (> 0)$ は、 $l_x^H/l_m^H < l_x^F/l_m^F$ を満たすとする。このとき、 H 国は x 財の生産に、 F 国は m 財の生産に比較優位を持つ。自国の比較優位財の生産に完全特化する各国は、当該財を輸出することで利益を享受する機会を持つ。

いま、 j 国内で i 財の生産に投下される労働量を $L_i^j (\geq 0)$ として、各国の各財の技術的生産関数 ($Y_i^j : \mathbb{R}_+ \rightarrow \mathbb{R}_+$) を以下のように表しておく。

$$Y_i^j = Y_i^j(L_i^j) \equiv \left(\frac{1}{l_i^j}\right)L_i^j.$$

また、両国とも同規模の労働賦存量 $L^j (> 0)$ の下で、生産可能性集合が次のように定義されるとする。

$$y^j \equiv \{Y^j = (Y_x^j, Y_m^j) \in \mathbb{R}_+^2 \mid l_x^j Y_x^j + l_m^j Y_m^j \leq L^j\}.$$

各国の比較生産費 (l_x^j/l_m^j) はその国内相対価格 (p^j) に等しくなる、すなわち $p^j = l_x^j/l_m^j$ であるため、 x 財を輸出する H 国側からみた交易条件 (p^*) について $p^H < p^* < p^F$ が成立するならば、両国に貿易利益が発生する (図 1.1)。もし H 国が F

7 このモデルは、リカード自身の比較優位モデルとは異なるものであるが、ジョン・ミルのものとは類似している (行沢 1978)。しかし、リカードの冤罪の原因を探ることが本稿の主題であり、それにジョン・ミルが関わっているのであるから、後者に近いモデルで貿易利益の分割を議論しておく必要がある。

8 この図は、以下の議論との整合性を考えて、コブ＝ダグラス型効用関数を念頭に置いて描写されたもの

図 1.2 自国だけに貿易利益が発生する場合 ($p^H < p^* = p^F$)

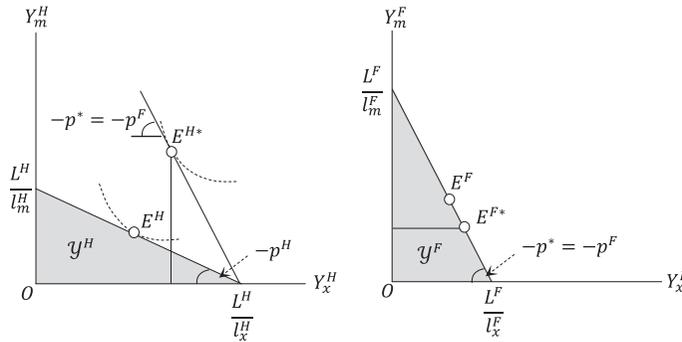
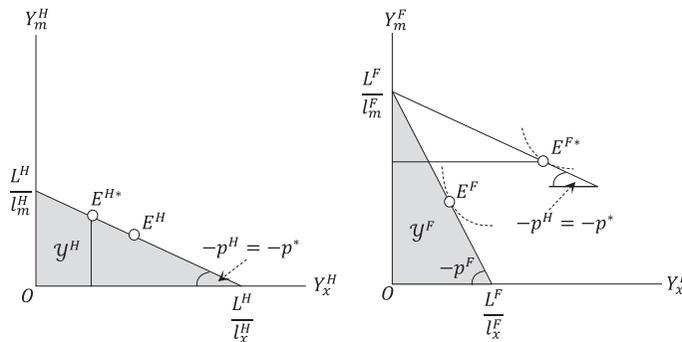


図 1.3 外国だけに貿易利益が発生する場合 ($p^H = p^* < p^F$)



国の国内価格で貿易する，すなわち $p^H < p^* = p^F$ であるならば， H 国は全利益を取得する（図 1.2）。もし F 国が H 国の国内価格で貿易する，すなわち $p^H = p^* < p^F$ であるならば， F 国は全利益を取得する（図 1.3）。

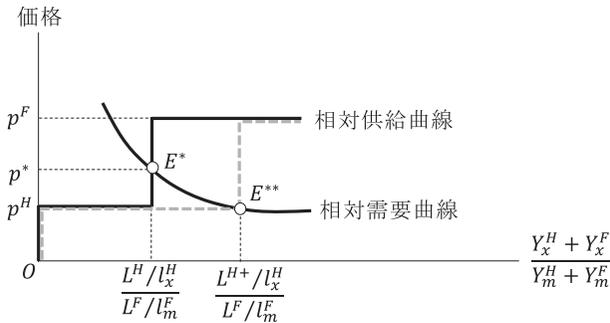
貿易利益の二重独占とは，各国は比較優位財を輸出するとして，自国は交易条件 $p^* = l_x^F / l_m^F (> l_x^H / l_m^H)$ の下で貿易利益のすべてを取得したのちに，外国もまた $p^* = l_x^H / l_m^H (< l_x^F / l_m^F)$ の下でその全部を取得すると考えてしまうことを意味する。では，交易条件が一方の国の国内相対価格に一致するのはいかなる場合であるか。交易条件の決定が需給説ないし相互需要説によって理解される一般的な教科書では，労働賦存量が圧倒的に多いか技術水準が圧倒的に高い大国とそうでない小国とが貿易する時に，交易条件は大国の国内相対価格に引き寄せられると説明される。その場合，小国のみが貿易利益を得る。

図 2 は，右下がりの相対需要曲線と右上がりの階段状の相対供給曲線との交点で交易条件が決まることを描写したものである ($L^H \approx L^F$)。もし自国の労働賦存量が外国に比べて圧倒的に多ければ ($L^{H+} \gg L^F$)，図のように，不変の相対需要曲線と階段状の

ㄨ のである。

9 これはまた，2つの交易条件を同時に考えることでもあり，その意味でも誤りである。

図2 相対需要曲線と相対供給曲線による交易条件の決定



点線で描かれる相対供給曲線との交点で示される交易条件は、自国の国内相対価格に等しくなる ($p^* = l_x^H / l_m^H$)¹⁰。

他方で、いずれか一方の国の技術水準が圧倒的に高い場合に、交易条件がその国の国内相対価格に引き寄せられる場合については、久松（2022 b: 90-93）で考察されたエリスの比較優位モデル（Ellis 1825: 388）に相互需要説を適用して説明しておこう。イングランド（ $j = H$ ）とフランス（ $j = F$ ）、綿織物（ $i = x$ ）と絹織物（ $i = m$ ）からなる経済において、予算集合を次のように記述する。

$$B^j \equiv \{X^j = (X_x^j, X_m^j) \in \mathbb{R}_+^2 \mid p^j X_x^j + X_m^j \leq p^j Y_x^j + Y_m^j\}.$$

いま、予算 B^j の下で、各国は自国の享楽（効用） $u^j(X^j)$ を最大にする各財の消費量の組合せ X^j を決める。ただし、ここでは、Chipman（1965: 686-87）がジョン・ミルのケース（the Millian case）と呼ぶコブ＝ダグラス型関数で効用を定義している。開放経済においては各国が比較優位財の生産に完全特化する（ $L_m^H = L_x^F = 0$ ）として、

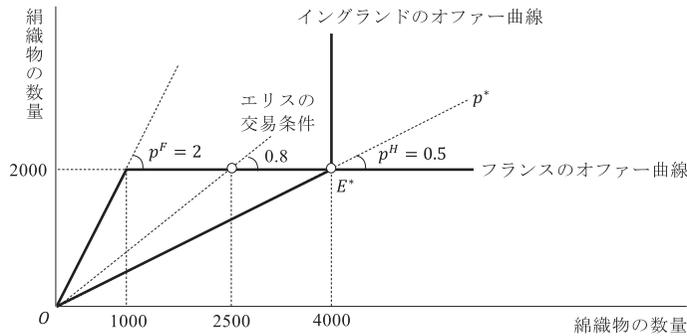
$$\max_{X^j \in \mathbb{R}_+^2} u^j(X^j) \equiv (X_x^j)^{\frac{1}{2}}(X_m^j)^{\frac{1}{2}} \quad \text{s.t.} \quad X^j \in B^j,$$

を解くと、 $(X_x^H, X_m^H) = (Y_x^H / 2, p^H Y_x^H / 2)$ と $(X_x^F, X_m^F) = (Y_m^F / 2p^F, Y_m^F / 2)$ を得る。

ここで、エリスの数値例に従って、両国で同一規模の労働賦存量を $L^j \equiv L_x^j + L_m^j = 200$ で、イングランドがフランスよりも圧倒的に高い生産性を有している技術体系を $(l_x^H = 0.025; l_m^H = 0.05; l_x^F = 0.1; l_m^F = 0.05)$ で与える。 y^j と B^j が一致するものと考えた時、各国のオファー曲線は図3のように描かれる。原点から出発して絹織物と綿織物の数量の組合せが（4000, 2000）の点で屈折し垂直方向にのびる線がイングランドのオファー曲線である。また、原点から出発して（1000, 2000）の点で屈折し

10 この詳細については、さしあたり Feenstra（2016: 1-3／訳 2-5）を参照。

図3 相互需要説による交易条件の決定



水平方向にのびる線がフランスのオファー曲線である。図では両曲線の交点で決まる交易条件は、 $p^* = p^H = 0.5$ に一致しているのを確認できるであろう。要するに、技術力の圧倒的に高いイングランドの国内相対価格に交易条件は引き寄せられるのである。¹¹

さて、リカード本人の2国2財の有名なモデルへと話を移そう。イングランド ($j = H$) とポルトガル ($j = F$) の間でクロス ($i = x$) とワイン ($i = m$) が貿易されるこの仮想世界はすでに開放経済体制をとっており、クロス Y_x^* (> 0) 単位とワイン Y_m^* (> 0) 単位との交換が取り決められている。ただし、 Y_i^* は1とは限らない。この Y_i^* を財 i の約定数量と呼ぶことにしよう。ワインで測ったクロスの開放経済均衡相対価格 (財 m を輸入して財 x を輸出する国にとっての交易条件) を p^* で表し、この取決めを $p^* Y_x^* = Y_m^*$ で定める。 m の輸入国 H と x の輸入国 F が享受する、労働の節約として貿易利益 π_L^j は、「18世紀ルール」(Viner 1937: 440/訳 423-24) に従って以下のように表現されうる。

$$\pi_L^j = \begin{cases} l_m^j Y_m^* - l_x^j Y_x^* & \text{if } j = H, \\ -(l_m^j Y_m^* - l_x^j Y_x^*) & \text{if } j = F. \end{cases}$$

リカードは、各国で各財の約定数量を生産するのに必要な労働量 ($l_i^j Y_i^*$) を、どの j についても $\pi_L^j > 0$ を満たすような4つの数字で与えた。つまり、貿易利益の二重独占は、この2国2財モデルにはなかったのである。¹² 数字のこのような解釈は、スラッファによって、彼が『リカード全集』編集を任された年に発表された論文 (Sraffa 1930) で最初に与えられた。かくして、誤ったのは『綱要』第1・2版でのミルであってリカードではないとされ、ジョン・ミルの誤解が主張されたのである。爾来、リカードになさ

11 この交易条件は、エリスが独自の手法で導出した値 0.8 とは異なる。ゆえに、 $u^j(X^j)$ から導出されるオファー曲線による相互需要説がエリスによって採用されていなかったことは明らかである。ジョン・ミルがエリスを相互需要説の考案者のひとりとみなさなかつたのは、このためだったのかもしれない (久松 2022 b: 102)。ジョン・ミルの相互需要説については、藤本 (1992; 2001) の優れた研究を参照。

12 $\pi_L^H > 0$ かつ $\pi_L^F > 0$ を満たすならば、 $l_x^H / l_m^H < p^* < l_x^F / l_m^F$ が成立するからである。

れたこの疑惑は「ぬれぎぬ問題」と呼ばれてきたのである。以下では、ジョン・ミルがリカードの4つの数字を約定数量の生産に必要な労働量と読めなかったこと以外から生じる別の原因を、リカード『原理』誕生以前に遡って再考する。

Ⅲ リカード『原理』

「ごく控えめな」リカードは、「自分の理論が正しいと確信していたにもかかわらず、自説を解説し表現する能力が乏しいと考えて、書物でそれを公表することに躊躇していたため」、彼の『原理』は、「父の懇願と強い勧めがなかったならば、出版されなかっただろうし、それどころか書かれもしなかったであろう」（Mill 1981: 31／訳 52-53）。こう述べたのは、ミルの息子ジョン・ミルであった。この「経済学に一時代を画した書物」（*ibid.*）の誕生は、マルサス地代論・利潤論・賃金論に不満を抱いたリカードが、「私に本を書ける能力があればなあ」（Ricardo 1951-73, VI: 314／訳 371）と漏らした一通の書簡（1815年10月24日付）がきっかけであった。書簡の受取人ミルはリカードに言う。「どうして「私に本を書ける能力があればなあ」などと嘆くのですか。あなたが書くことを邪魔するものは何もございません。ご自身の書く力に自信が足りないのです。あなたには、知識もほとんどなく注目すらほとんどしない人にも理解しやすいように、ご自身の考えを書く技能の練習が少々足りないようです。少し練習すれば必ずこの技能を身に付けることができます」（30日付；*ibid.*: 321／訳 380）。

ミルは^{スクールマスター}「学校の先生」としての「権威」を振りかざし、その生徒であるリカードが^{オブス・マグナム}「主要作品」を創る際にやるべきことを丁寧に教えていった。「未熟な著者」に対して^{ミル}先生が推奨した執筆方法は、（1）ある主題について頭に浮かんでくる事項をすべて書いたのちに、（2）段落ごとの傍注を1頁の片側に付し、最後に（3）傍注を吟味しながら全体の配列を整えるというものである。彼はまた、予想される読者のうち、理解力や知識の点で中位の読者層に向けて書き始め、全体で2度書く——1回目は、主題に関連しその解明に有用なすべての着想を書き出すことだけに専念し、2回目は、1回目に書き出したものをいくつかの適当な塊にまとめ、それぞれの塊を1つの項目として仕上げていく——ことを付け加えた（*ibid.*: 324／訳 384; 329-330／訳 389-390; VII: 7／訳 7）。

「経済学に関する最も優秀な思索家（*thinker*）」を「最も優秀な著者（*writer*）」に育て

13 こうすることで1度に多くの傍注を眺めることができ、段落どうしがどのように対応しているか、段落どうしが実質的に同じものになっていないか、段落どうしが矛盾していないか、段落を移動させたほうが効果的でないかなどの判断がしやすくなるという（Ricardo 1951-73, VI: 329／訳 389）。ジョン・ミルによれば、傍注は、「著者が考え方の順序や叙述の一般的な特徴を判断しやすく、また改善しやすくすることができるように、段落ごとに付された短い要約」で、それは「ベンサム氏〔Jeremy Bentham, 1748-1832〕が彼の著作物のすべてに付していたもの」だったという（Mill 1981: 65／訳 117）。

たいと願う先生は、無駄な社交を避け、これまで仕事のために使われていた朝食前と夕食後の空き時間を経済学研究に費やすことを生徒に命じた (*ibid.*, VI: 340/訳 401)。しかし別稿も手掛けていた生徒は、体系書の作成に本格的に乗り出せずにおり、その別稿が手を離れたとしても、体系書の執筆再開に際して「価格という言葉で早々に行き詰まる」と危惧していた (*ibid.*: 348/訳 412)¹⁴。

その後、生徒は体系書の本格的な執筆を再開したが、1816年8月8日付の彼の手紙には元気が感じられなかった。「あなたのお叱りを恐れる気持ちもありますし、あなたがいつも私の忍耐を励ましてくれたことも思い出しますが、にもかかわらず、執筆は自分の力ではとても遂行できない仕事であると思い、しばしば投げ出したくなるのです」(VII *ibid.*: 53/訳 62)。先生は長文の手紙で生徒を叱咤激励した。「どんな主題についても誰の前でも臆することなく話をする人が、どうして書くことに尻込みなさるのでしょうか。書くというのは紙面で話をするに他なりませんのに。…誰しも神の恵みと神感の導きとによって良書を綴っているとでもお考えなのですか。ルソーは、彼が公表したものはどれも1回では満足できず最低5回は書き直したものと説明していますよ。…かれこれこの主題についてこれまでに書かれたかなりの分量の文書をお持ちなのはわかっていますので、それらをできるだけたくさん、つまりご執筆の継続に絶対に必要なものを除くすべてのものを、小包にしてこちらに送って下さい」(*ibid.*: 58-60/訳 68-70)。

再度の激励によってやる気を取り戻した生徒は、「現在あちこちに散在しているものを早急に筆写して送らしましょう」と意気込んだ (*ibid.*: 65-66/訳 76)。先生は言う、「筆写という単調な骨折り仕事にあなたの時間が少しでも浪費されるというのはとても残念ですから、どんなに費用がかかっても、あなたに代わってとにかく誰かに筆写をやらせてもらうべきです」(*ibid.*: 73/訳 85)。この助言は、比較優位の原理を弁護士と秘書で例示したサミュエルソン (Samuelson 1980: 627/訳・下 712) を彷彿させるかのようである。しかし、「悲しいことかな、私にはそのための支払いをするだけの余裕はありませんから、私は自分で筆写することを余儀なくされております」というミルの嘆きは、この対話のうちに比較優位説があるとの幻想を打ち砕く。彼は続けて言う。「ですが、もし私があなたであったならば、確実に、自分で筆写することは1頁もないでしょう」(Ricardo 1951-73, VII: 73/訳 85)。リカードが公債取引によって多大な財をなしていたことは、英国財界にとって周知のことだった。生徒は、筆写のために誰かを雇用す

14 ミルもリカードの体系書に「価格の原理的説明」が不可欠とみていた (Ricardo 1951-73, VII: 7/訳 8)。

15 ミルは、リカードの(投資による)推定平均年収が20,000ポンド超であったこと (Ricardo 1951-73, X: 103/訳 127)を知っていたかのようだ。「私の財布があなたの財布と同じようにいっぱい詰まっているなら、たいそう喜ばしいでしょう。…私に毎年20,000ポンド与えてみて下さい。そうすれば、10年間で議会の急進的な改革を実現してご覧に入れましょう」(*ibid.*, VII: 181-82/訳 214)。また彼は、のちに自著『英領インド史』の献呈本の贈り先リストから「この本を買うだけの資力を持っている」リカードの名前を除外している (*ibid.*: 197/訳 233)。

るには「あまりに若輩の著者」であることや加筆修正を伴う筆写であることなどから、先生の助言には従わなかった（*ibid.*: 83／訳 98）。

「価格の法則」を2週間考え抜いた末に問題の解決方法を見出した生徒は、1816年10月14日付の手紙で、『原理』第1版の第1～6章（第2・3版の第1～7章）に相当する草稿を小包で届けることを先生に伝え、すぐに「課税に関する主題」を「一貫した理論」にまとめる仕事に取り掛かった（*ibid.*: 83-84／訳 98-99）。

一方、10月23日になっても小包を受け取れていない先生は、その苛立ちを生徒にぶつけた。しかし2日もしないうちに、第1弾の小包は無事に先生のもとへと届いた。先生は、自分の「我慢のなさ」を悔いるとともに、生徒が着手した課税論に期待を寄せた（*ibid.*: 85-86／訳 100-102）。

11月17日の朝、生徒は、課税論の草稿（『原理』第1版の第7～16章／第2・3版の第8～18章に相当）を含む第2弾の小包を「雑な状態」のまま送付した。かつての見解からの変更を含むこの課税の「諸原理」が先生から承認されることを生徒は期待した（*ibid.*: 87-88／訳 104-105）¹⁶。

一方、草稿の読解に悩んでいた先生は、「毎日の限られた時間」の中で内容摘要の傍注を書きながら入念にそれを読み込み、11月18日までにそれを読了した（*ibid.*: 97／訳 115）。このとき彼が読んだのは、第1弾の小包に含まれていた分であって、課税論の草稿は未見であった¹⁷。彼は、番号が適切に付された各段落の内容摘要を目の前にしつつ、すべての命題が完璧に証明されていることを確信した。「文体もまた実に優れています。あなたはこの点でもことのほか進歩なさいました。もしあなたがそれをすぐに印刷に回すつもりであったとしても、変更を勧めるべき表現は全体でほんのわずかしありません。…切に望みたいのは、今とまったく同じ仕方で仕事を続け、ご自身の全思想をこの形で紙面に書き下ろしてしまうことです。そして全主題を完了なさることで。そうすれば、排列と区分について助言をすることは容易になるでしょう。またそうすれば、あなたに不朽の榮譽をもたらさうる作品の仕上げをなさることも容易になるでしょう」（*ibid.*: 99／訳 117）。

この総評の前に、先生は個別の論点について簡単な感想と意見を述べている。労働集約財の価格は賃金率の上昇によって相対的に（資本集約財の価格と比較して）騰貴するという「奇妙な効果」や、投下労働量が主として「交換価値の原因であり尺度であると

16 しかし、小包送付後に資本利潤への課税に誤りがあることに気づいたリカードは、それを告げる追伸を3日後に（11月20日付で）送付している（Ricardo 1951-73, VII: 90-91／訳 107-109）。

17 ミルは、発送済みであった第2弾の小包をまだ受け取っていなかった。このことは、同様の書簡の中に、「残りの部分をお送り下さい」とあることからわかる（Ricardo 1951-73, VII: 99／訳 117）。

18 この効果は、ある意味では、国際貿易の分野でいうストルパー＝サミュエルソン定理に相当するものである（久松 2022 a: 155）。また、Ruffin（2002: 737-78）によると、リカードがこのストルパー＝サミュエルソン定理に類似にした理論を発見したことが彼による比較優位の原理の発見に繋がったという。↗

いう一般原理」に加えて、「106頁に始まって終わりまで続いている外国貿易に関する研究」(『原理』における外国貿易の章に該当)に賛意が寄せられている。「外国貿易は一国民の財産の価値を増すわけではないという点、同種の商品を国内で生産するよりも外国で生産するほうがいっそう多く要費するのにそれらの諸商品を外国から輸入することが一国にとって有利な場合があるという点、一国内での製造技術の変化が貴金属の新たな配分を生み出すという点、これらは最高度の重要性を持つ新しい命題であり、あなたはそれらを完全に証明しています」(*ibid.*: 98-99/訳 116-17)。

3つの貿易命題のうち、逆説であるかのような第2の命題は比較優位の原理を指しており、おそらくはリカードの有名な2国2財モデルからの帰結が念頭にあったものと考えられる。先述したように、このモデルでは、貿易利益の二重独占という誤った議論はなされていなかった。

「この科学の改善者とみなされる資格を与えるようなものを創出したい」と願う生徒にとって、ミルによる高評価は「大きな励み」となった¹⁹。しかし、第2弾の小包に含めた課税論はいっそう複雑な問題を扱う必要があったため、リカードは、ミルに成績を下げられるのではないかと心配していた(*ibid.*: 100/訳 118-19)。

課税論の草稿を「前の部分と同様に注意深く」読んだ先生は、「独創的かつ深遠な」リカードの課税に関する「諸学説」に全面的に賛同し、「租税の真の働きが明らかにされたのは今が初めてである」と感服した(12月16日付)。内容面でのこの評価は生徒にとって光栄なものだったのであろうが、彼の予想通り、込み入った問題を読者に明快に伝える技術については、ミルはもう少し指導の必要性を感じたようである。「しかしながら、この部分には、それを印刷に適したものにするためには手を加えなければならない点があるが、他の部分よりも少し多いようです」と述べた後、先生はこう続けている。「ご本の準備に際して決断されなければならない問題は、この科学について何も知らないあなたの生徒のためにそれを書いてやる…場合のように、この科学の全体の展望を著書の中に含めようとなさるのか、それとも、この科学のうちでご自身が改善なさった部分だけで満足なさるのかということです。先生が生徒に勧めたのは後者の方法であり、その後で「ご自身の諸原理をモデルとし (modeled)、ファニーさん [Fanny Ricardo, 1800-20] に教えるようなこの科学全体の展望を提供してもよいでしょう」と、彼は助言した(*ibid.*: 106-7/訳 126-27)。生徒は、もし自分が注視した経済学の諸原理が「好意をもって迎えられようようなことがあれば、…先々、この科学の全体に渡る展望を作り上げるという楽しい仕事に向かいましょう」(*ibid.*: 112/訳 133)と返答したが、彼がその先に

19 この解釈に対する Gehrke (2015: 806) の批判については、久松 (2016 a: 94) を、ストルパー=サミュエルソン定理については、さしあたり Feenstra (2016: 12/訳 18) を参照。

19 この手紙をリカードが受け取ったのは11月29日の夕方であった (Ricardo 1951-73, VII: 100/訳 118)。

進むことはなかった。前者の方法，すなわちリカード経済学を展望する初学者向けの書物の提供を試みたのは，ミルであった。リカードの娘ファニーを，ミルの息子ジョン・ミルに置き換えてみると，それがよくわかる。²⁰

さて，最後の草稿は，アダム・スミス（Adam Smith, 1723-90）の『国富論』（初版1776年），ブキャナン（David Buchanan, 1779-1848）によるその注釈版（1814年）²¹，セー（Jean-Baptiste Say, 1767-1832）の『経済学概論』第2版（1814年）に関するリカードの所見を含むものだった。第2弾の小包の送付後にスミスとセーの著書を再読したリカードは，それらに対する所見（ブキャナンへの見解も含む）を原稿に差し込むべきかどうか，その場合どのような形で挿入するかを考えていた。『国富論』については，その評注を別書で出版することもリカードの念頭にあったと思われる。また彼には，「存命中の著者であり，友人でもある」セーへの批判を「公に強く」表明することに幾分抵抗感があった。そこで彼は，「アダム・スミスに対しては感じられない」ある種の「扱デいリにくカさシ」について先生ミルの意見を求めた（*ibid.*: 89／訳105）。以下では，最後の草稿に関する彼らの往復書簡を問答形式で引用しておこう。

リカード
生徒「アダム・スミス〔の著書〕を再読すると，疑問を呈する意見が多く見つかります。いずれも価値に関する彼の本源的な誤りに基づくものであると思われます。彼の誤りは特に〔輸出〕奨励金に関する章に見られ，植民地および母国の利益に関する論点にも彼の誤りがいくつかあると思われます。彼の本の中で誤りだと思われるものをすべて言及するほうがよいでしょうか。そのほうがよければ，拙著の中で類似の問題を論じる箇所にその議論を組み入れるほうがよいでしょうか，それとも，補論に言及しておいて，本文から離してそこで論及するほうがよいでしょうか。ご助言をお願いいたします」（*ibid.*: 100／訳119）。

ミル
先生「アダム・スミス〔の著書〕の中で，彼の意見とあなたの諸原理とが異なる部分については，彼の誤りを取り上げて論評する必要があると思います。〔輸出〕奨励金と〔輸入〕禁止の学説は，非常に多くの誤りが流布されているもので，あなたは十分に論ずるべきでしょう——植民地についてもそうすべきでしょう。実際のところ私は，この論点についてあなたに出し惜しみをするのではなく，むしろご自身の諸原理を適用することでその誤謬を例証し暴露することに何よりも力を注いでもらいたいと思っています」（*ibid.*: 107-108／訳127）。

リカード
生徒「セー〔の著書〕から引用する場合は，英語にすべきでしょうか，それともフラン

20 ただし，ジョン・ミルは父に経済学を教えて欲しいと頼んだというよりは，父からその厳格な教育を強いられたというのが事実である。

21 ブキャナン注釈版のスミス『国富論』については，Hisamatsu（2019: 288-89）も参照。

ス語にすべきでしょうか」(*ibid.*: 101/訳 119)。

ミル先生「私ならセー〔の文章〕を英語で引用すると思いますし、彼の誤りを指摘しないわけにもいかないでしょう。もっとも、彼にふさわしい丁寧な態度をもってですが」(*ibid.*: 108/訳 127)。

リカード生徒「アダム・スミスの著書に対するブキャナンの論評には、重大な誤謬もいくつかありますが、一方で判断力の確かなものもいくつかあります。とにかく彼に言及することがあれば、これらの評言の貢献を指摘しておくことが妥当であると思われる」(*ibid.*: 101/訳 119)。

ミル先生「ブキャナンの誤謬に言及するにしても、彼が真理を理解している箇所ではその功績を認めるべきでしょう。しかし、彼が誤っていない場合にはわざわざ言及する必要はまったくございません。あなたが^{〔アダムスミス〕}A・Sを批判するところで、ブキャナンも同じ仕方でスミスを批判しているならば、その際にはあなたは彼にしかるべき功績を認めるべきです。あなたが^{〔アダム〕}A・スミスに言及する必要はないと考える部分についてはすべて、ブキャナン氏の論評が正しかろうと誤っていようと、私ならそれに言及することはないでしょう。^{〔ブキャナン〕}B氏はきわめて貧弱な論理的思考の持ち主(very feeble reasoner)であり、この科学に大きな貢献をなすとは思えません」(*ibid.*: 108/訳 127-28)。

ブキャナンに関する問答からわかるように、ミルにとって経済学の「真理」とはリカードの学説に他ならなかった。またこの問答で特に注目すべきものは、ミルが——執筆予定の補遺「植民地論」との関係からであろうが——リカードのスミス植民地貿易論批判に期待を寄せていた点である。『原理』における当該批判にあたる章(「植民地貿易について」)には、次のような興味深い主張がある。「たとえば、通常の事情の下では、イングランドはいつもフランス製の財をフランスにおける当該財の自然価格で買えるし、フランスもまたイングランド製の財をイングランドにおけるその自然価格で購入できるという同等の権利を持っているだろう」(*ibid.*, I: 341/訳 391)。この主張の具体的な内容は、「富国と貧国の金・穀物・労働の比較価値について」の章において、穀物の貨幣価格を用いた数値例で知ることができる。

閉鎖経済下のイングランドとフランスにおいて、穀物1クォータあたりの自然価格がそれぞれ£6と£3であるとする。もし両国が開放経済へと移行し、イングランドがフランスからの安価な穀物を輸入できるならば、イングランド市場における長期的な穀物価格は、£6と£3の間ではなく、フランスの自然価格£3に下落する(*ibid.*: 374/訳 431)。

この議論でもって、リカードが、ある国の輸出財価格が輸入財価格に占める割合を意味する交易条件を、その貿易相手国の比較生産費で考えようとしていたと読めなくもな

表1 比較生産費説を適用した場合

	金	穀物
イングランド	1	6
フランス	1	3

い。IIでみたように、比較生産費説でそのような交易条件を考えるならば、貿易利益の一国独占が実現してしまう。この解釈を正しいものとするれば、リカードは冤罪どころか、確かに罪を犯していたとも読めるのである。ここで、上の例解によってリカードが何を意図していたのかではなく、比較生産費説を知る読者にとってはいかなる解釈が可能であるかを考えてみよう。そのために仮想的に生産物としての金を登場させる。

いま、金1グラムの生産に必要とされる労働量（固定係数）はいずれの国においても1単位だが、穀物1クォータの生産に必要とされる労働量（固定係数）は、イングランドでは6単位、フランスでは3単位であるとしよう（表1）。穀物で測った金の機会費用ないし比較生産費は、イングランド（ $p^H = 1/6$ ）のほうがフランス（ $p^F = 1/3$ ）よりも小さくなる。ゆえに、イングランドは金の生産に、フランスは穀物の生産に比較優位を持つ。比較優位の原理に従い、イングランドは金を、フランスは穀物を輸出する。

そこで、金の単位で測った穀物1クォータの価格を $\bar{p}^H \equiv (p^H)^{-1} = 6$ （グラム）と $\bar{p}^F \equiv (p^F)^{-1} = 3$ （グラム）で考え、さらに金1グラムの貨幣価値を£1で仮に固定しておく。この時、穀物1クォータのイングランド価格（ \bar{p}^H ）は£6、そのフランス価格（ \bar{p}^F ）は£3と表示される。こうして金は、貿易財とも、貿易の決済手段ともみなされる。これは、金を、外国貿易を含む「流通の一般的媒介物」（*ibid.*: 137/訳159）とする考え方を採用したものである。

さて、イングランドがフランス産穀物1クォータを£3で購入するということは、イングランドが金3グラムを輸出し、フランスの国内価格（ \bar{p}^F ）で穀物1クォータを輸入することを意味する。国内で穀物1クォータを購入するには£6が必要であるイングランドは、この貿易によって1クォータの購入につき£3（金3グラム）を節約できることになる。この貿易は金3グラムの生産に必要な労働3単位分の節約をイングランドに可能とするわけである。他方のフランスにとっては、穀物の国内市場での販売とイングランドへの輸出とは無差別である。つまり、 \bar{p}^F での取引はフランスに貿易利益をもたらさないのである。言い換えると、 \bar{p}^F での貿易利益はイングランドによって独占されるのである。

以上は英仏間の穀物貿易に関する数値例を比較生産費説の範疇で強引に解釈したもののだが、実はこの例には次のような続きがある。もしイングランドの穀物消費量（需要量）が100万クォータ未満であれば、穀物価格は£3にとどまるが、それが100万ク

り歩きし、リカードが一方の国の自然価格で必ず貿易すると主張しているかのように読者が誤解した可能性は否定しえない。「私が強く主張したいことは何かといえ、それは、諸商品が独占の対象ではない限り、輸入国でのその販売価格を究極的に規定するものは、輸出国でのその自然価格であるということだけである」(ibid.: 375/訳 431)。

さて、先生は12月16日付の書簡で、『原理』に含めるべき「すべての議論を紙面に書き下ろす仕事を続ける」ように生徒に指示を与え、最後にこう付け加えた。「私たちの目の前にすべてが出揃った時には、それをどのように区分し整形すれば最も強^{アドヴァンテージ}みを出せるかを、2人で額^{ひたい}を寄せて検討することにしましょう。もう1つの荷物ができ次第すぐに私にお送りくださいませ」(ibid., VII: 108-109/訳 128)。「指導教授」のお墨付きを得たことに満足したリカードは、1817年2月初旬にロンドンでの面談を希望した(ibid.: 111-12/訳 132-33)。だが、その後の様子を往復書簡によって明らかにすることはできない。

8折両面印刷の書物は毎日1折ずつできあがっていた。3月9日までに、リカードは11折分(外国貿易の章の後半を過ぎた辺りまで)の校正を済ませていた。そのころ彼が特に気にしていたのは、『原理』初版の最終章「地代に関するマルサスの所見」に当たる部分について、彼がマルサスの地代論を誤解していないかどうかということであった。彼はその原稿を同封した手紙を3月9日付でマルサスに送り、当事者の事前チェックを受けることにした(ibid.: 139-40/訳 165)。原稿は22日以降に返却され(ibid.: 143/訳 169-70)、リカードの予定通りであればおそらく26日に印刷所に回された(ibid.: 145/訳 171)。『原理』は予定日(4月7日)より10日以上遅れ、4月19日に公刊された(ibid.: 147/訳 174-75)。経済学史における不滅の金字塔はこうして完成した。その後、執筆業における師弟の立場は入れ替わり、ミルは本格的にリカード経済学派へと入門することになったのである。

『原理』初版は、リカードのもう1人の弟子マカロック(John Ramsay McCulloch, 1789-1864)の書評(McCulloch 1818)の効果も手伝い、よく売れた。「需要の増大に伴って供給を増加させると儲かる」という「経済学者の性質を多分に備えた」出版社のマリー(John Murray, 1778-1843)は、1818年11月初頭と推察されるが「はなはだ唐突に」、第2版の出版許可をリカードに求めてきた(ibid.: 337/訳 394)。初版本を「1年以上も開いてみていなかった」リカードにはそれが目新しく感じ、誤謬や不正確な表現

46-48/訳 46-48; Hisamatsu and Fukushima 2021 を参照)。彼のこの小冊子では差額地代説が展開されており、リカードも『原理』序文においてそれを高く評価している(Ricardo 1951-73, I: 5/訳 5)。リカードもまた、1815年2月24日に出版された彼の『穀物の低価格が資本利潤に及ぼす影響についての試論』(ibid., IV: 9-41/訳 13-50)において差額地代説を論じていたからである。リカードの蔵書にあるウェストの小冊子には、本人による次のような書込みがなされている。「これは私の『資本利潤についての試論』よりも先に公刊されているが、私がそれを手に入れたのは、私の『試論』が出版された後のことだった。D・リカード」(ibid.: 6/訳 9)。

を見つけやすかった (*ibid.*: 327/訳 382)。11月の第3週目以降、彼は、排列を変えずに加筆修正に精を出してきた (*ibid.*: 333/訳 389; *ibid.*: 337/訳 394)。ミルもこの再版に賛成したが (*ibid.*: 349/訳 408)、初版におけるような多くの助言をリカードに与えることはなかったようである。後述のように、それは彼の多忙さゆえのことであろう。

1819年2月27日、『原理』第2版は公刊された (*ibid.*, I: 1/訳 lxviii)。ミルがリカード経済学説を教本として息子に教育を始めたのは、それからまもなくのことであった。

IV ミル「植民地論」

リカード『原理』初版の公刊以後のミルは、自身の『英領インド史』の出版(1817～18年に全6巻刊行)のために多忙な日々を送っていた。その最中、『大英百科事典』^{エンサイクロペディア・ブリタニカ}の編者ネイピア(Macvey Napier, 1776-1847)は、その第6版の補遺「植民地論」の執筆をミルに迫っていたのである(1817年8月24日付のリカード宛書簡;*ibid.*, VII: 183/訳 216)。それは彼にとっての「重荷」だったようで、当初の彼は誰かにその執筆の交代を願っていた (*ibid.*: 195/訳 231)。ネイピアに宛てた彼の手紙(Napier 1879: 16)では、論説の最良の寄稿者としてトレンズが推薦されている(久松 2014: 77)。トレンズがその寄稿者となることはなかったが、彼の植民に関する初期思想は1817年の『パンフレッター』に掲載された論文(Torrens 1817)で読むことができる。また、ミルはリカードにその寄稿を代わってもらいたいと考えたこともあった。しかしながら「そのような束縛」をリカードに課す「権利」は自分にはないと結論した彼は、自ら筆を執り、1817年10月19日にはその作業をほぼ終えていた(Ricardo 1951-73, VII: 195/訳 231)。彼の執筆開始は1817年8月24日以後と考えられるので、この補遺は2か月足らずで書かれたものと推測できる。

「植民地論」は、序論・第1節・第2節・結論で構成されている。序論(Mill 1818: 3-4)では、Colonyに2つの概念、(i)母国を離れて辺境の土地に移住・定住して生活する人(population)を指す概念および(ii)母国に属する辺境の領地(territory)を指す概念があることが示され、各概念を主題とする議論が第1節(*ibid.*: 4-16)と第2節(*ibid.*: 17-31)で展開されている。これらの節からなる本論を踏まえて、結論(*ibid.*: 31-33)では、哲学的急進派の概念である「支配する少数者(the ruling few)」の利益と「従属する多数者(the subject many)」の利益との対置によって、植民地の保有が少数者による悪しき統治に繋がっていることが主張されている(Winch 1965: 45/訳 86)。以下では、本論部分のごく簡単な内容を提示しておこう。

25 これは、1821年4月19日(『原理』刊行年月日)から10月19日(「植民地論」のほぼ完成時期)までにミルがリカードに書いた唯一の手紙である。ミルの多忙さはこのことからわかるだろう。

人としての植民に焦点を当てた第1節では、古代ローマや古代ギリシア、イギリスの各植民史をふり返りつつ、過剰人口の概念、賃金基金説、マルサスの人口命題、収穫逓減の法則、労働維持基金としての資本概念など、古典派経済学のさまざまな考え方や理論を駆使して、移民についての見解が与えられている。その見解は、過剰人口の捌け口として移民政策に好意的であった同時代のトレンズのものとはやや異なるものであった（久松 2015）。ミルは、植民地のほうが母国よりも土地生産性が高く、その結果として入植後の労働賃金がより高くなること、および母国から植民地への移動コストがかかりすぎないことを条件とする、移民への限定的賛同を示している（Mill 1818: 13; Winch 1965: 62/訳 107-8）。第1節の終盤では、豪州ニューサウスウェールズの流刑植民地政策に対する批判が展開され、犯罪者に対する有効な政策としては、ミルの功利主義の師ベンサム有名なパノプティコン刑務所構想が支持されている（Mill 1818: 14-16）。

領土としての植民地に焦点を当てた第2節では、幸福の総量に関する功利主義的思想、差額地代説、賃金利潤の相反原理、比較優位の原理、貨幣数量説などに依拠して、

- 26 「専ら食料の量に対して人口が多すぎる時にのみ、…人口は過剰であるといわれる。ある国が1年間に生産ないし獲得する食料の量は一定である。もし当該国がその一定量の食料で維持される以上の人口を抱えているならば、その国が維持できる以上の人数はすべて過剰な人口である」（Mill 1818: 7）。
- 27 「食料供給が人口に対して過少な場合に、国民の大部分がその労働に対してより少ない〔食料タームでの〕賃金、すなわちより少ない食料しか受け取っていないといふことは、それは快適な生活に必要な分よりも少ない量を受け取っていることを意味する」（Mill 1818: 7）。
- 28 「ある年、たとえば今年、イギリスの食料が国民に対して1万人分過少であると仮定してみよう。翌年、1万人分の食料が追加で栽培されることは疑いなく真実である。だが同時に、養われるべき人口が1万人追加されたとしたら、どこが改善されたことになるのだろうか。ほぼすべての場合において、現状がこの仮定に一致するような傾向が人口にはある。人口は現在の食料供給量に達するまで増加するだけではない。毎年食料の量を増やしていくならば、それと同時に人口も増加し続ける、しかも急速に増加し続けるため、食料は通例、国民に対してなお過少である。これはマルサス氏の著書『人口論』の大命題である」（Mill 1818: 10）。
- 29 「今年よりも多くの割合の国民を次の年に土地で雇用すれば、疑いなく、より多量の食料が生産される。その翌年にさらに多くの割合を雇用すれば、さらに多量の食料が生産される。しかし、…労働が新たに追加されるごとに土地の収穫が徐々に少なくなっていくために、次第に、より多くの、より大きな割合の国民を、食料の生産に使わなければならないようになるだろう」（Mill 1818: 11）。
- 30 「労働に雇用を与えるのは資本のみであるということは、十分頻繁に、十分明確に説明されてきた。それゆえ、われわれはこのことを公準として考えてもよいだろう」（Mill 1818: 13）。
- 31 「享樂の手段を同じだけ持つ二者のうち、一方からある量の手段を取り上げて、それを他方に与える場合、…一方から取り上げたのと同じだけの幸福が他方に加えられることはなく、二者の幸福の総計を減少させることになる、これが事実である」（Mill 1818: 22）。
- 32 「地代は、労働と資本の結合による生産物の一部ではない。それは、特殊な肥沃度を持つ特殊な土地のみが生み出すものである。それはまた、その特定の土地で用いられる労働と資本の全体に対する収益を超過して生み出されるものであり、何か他の用途に投じられる同一量の労働と資本の結合による生産物と同じ収益を超過して生み出されるものである」（Mill 1818: 26）。
- 33 「労働賃金を引き下げるもの以外に、資本利潤を引き上げるものはないという命題について考えてみよう。1つだけはっきり言えることは、資本と労働の共同作用により生産されるものの全体——それが何であれ——が資本の所有者と資本で雇用される労働者との間で何の控除もなしに分割される場合、労働賃金が上昇すれば資本利潤も低下するのであって、労働賃金の低下を伴わない限り、資本利潤の上昇はありえないということである。全体が両者の間で分割されるため、一方の受取り分が多ければ、他方の受取り分は必ず少なくなるのである」（Mill 1818: 25）。「利潤率が高くなっても物価が上昇することはない…。労働と資本の結合作用によって産出される全生産物は利潤と賃金とに分割され、利潤がいくらか上昇しても賃金は低下するため、生産費は以前と同一にとどまるのである」（*ibid.*: 26）。

植民地制度が議論され、それに対する批判的な見解が与えられている。注目すべきは、第2節の議論のいくつかが明らかにリカードのスマス植民地貿易論批判 (Ricardo 1951-73, I: 345-46/訳 396-97) に依拠していることである。たとえば、ミルは次のように述べている。

リカード氏の主張は決まっておく単純である。彼が言うには、労働賃金を下落させるもの以外に、資本利潤を上昇させるものはありえない。労働者の必需品の価格を下落させるもの以外に、労働賃金を下落させるものもありえない。しかし、植民地貿易の独占が労働者の生活必需品の価格を引き下げようとする傾向を持つとは誰も言わないだろう。ゆえに、植民地貿易の独占が資本利潤を増加させることはありえないのである。この2つの前提を証明するためにリカード氏が行った深遠な推論を知る者であれば、この主張が完全なものであるとわかるだろう。これほどまでに結び目がほどけないユークリッドの論証は存在しない。(Mill 1818: 25)

しかし、ある国が相手国の自然価格で貿易するという議論は少なくとも明確に出てこない。リカードのそうした主張がミルの印象に残されていなかったためであろうが、「植民地論」第2節では、貿易利益の適切な分割を包摂する2国2財モデルが登場する。それは、リカードのイングランド=ポルトガル・モデルを図案にして組み立てられたものであり、しかもミルによる貿易利益の算出方法はリカードのものよりも明示的であった。これらを勘案すると、一方の国の国内価格で貿易が行われるモデルをミルが創り始めたのは「植民地論」以後のことだったといえる。彼が『綱要』を書き終えるまでの間にリカードとその周辺で生じた出来事として次に考察すべき対象は、「マルサス評注」に関する諸事情である。

34 「ある国が他国に輸出するのは、その国が他国よりも〔絶対的に〕安価に作れるからではない。というのも、〔絶対的に〕安価に作れるものがなくても、その国が輸出を継続することができるからだ。その国が輸出するのは、そうすれば自国内で作るよりも安価に他国からものを取得できるからである。だがその場合、どうすれば自国で作るよりも安価にものを取得できるのか。それと交換に、自国でそれを作るよりも少ない労働しか必要としないものを与えることによってである。その交換に必要なその商品の量がいかほどであろうと構わない。その国がまさに提供するものが、それと交換に当該国が取得するものを自国で生産しうる場合よりも、少ない労働で生産される限り、それを輸出することがこの国の利益となる」(Mill 1818: 26)。

35 「他の諸物が同一にとどまると仮定すれば、貨幣はどの国においてもその量にちょうど比例した価値を持つということは、今や十分に理解されている。ヒューム氏の仮定に倣って、イングランドが真鍮の壁で囲まれており、その国の貨幣数量が一晩のうちに奇跡的に倍増するか、または半減するとしてみよう。前者の場合には、すべての貨幣の価値は以前の半分に減少し、後者の場合には、すべての貨幣の価値は以前の2倍に騰貴するだろう。ただし、全体の価値はまったく変わらないだろう」(Mill 1818: 30-31)。ヒュームの貨幣数量説については、Hume (1752: 66-67, 82-83) に仮設例がある。

V リカード「マルサス評注」

1819年4月7日付のマカロック宛書簡からわかるように、リカードは、マルサス『経済学原理』の出版を、実際の公刊の約1年前には知っていた（Ricardo 1951-73, VIII: 22/訳24）。リカードとマルサスは、会うたびに「しごく活発な論争」（*ibid.*: 41/訳46）を重ねた。1819年7月初頭にマルサスがロンドンに滞在していた折にも、彼の新著に含まれる主題をめぐって、2人は活発な討論を戦わせたものと推察される（*ibid.*: 47/訳53）。その後、リカードはクリスマスにマルサス夫妻をギャトコム邸に招待しようとしたが（9月21日付；*ibid.*: 74/訳84-85）、マルサスは自著の校訂のために多忙になると予想してその申し出を断った（10月14日付；*ibid.*: 107/訳122-23）。一大行事の最中にも経済論議で花を咲かせたいと願うリカードの姿は想像に難くない。

11月中旬頃、『経済学原理』の原稿は印刷所へと向かった。当書に「重要な課税の問題」がないと知るやりカードは落胆した（*ibid.* VIII: 131/訳148; 132/訳150）。公刊間近の1820年4月2日付の書簡で、マカロックはリカードに、「マルサス氏の著作が公刊される時に、あなたの経済理論に含まれる基本原理への彼の反論について、ご意見の評注をお送りいただきたい」（*ibid.*: 176/訳198）と要求し、リカードは8日付の返信でその申し出を快諾した（*ibid.*: 177-78/訳200）。

1820年7月中旬、リカードは、マルサスの『経済学原理』ただ1冊を携えて、親族とともにイングランド南部の海浜保養地ブライトンに滞在していた（*ibid.*: 212/訳239）。当地に来る前に、彼は、マルサスの著書を読み始めて間もないトラワ（Hutches Trower, 1777-1833）がしたためた1通の手紙を受け取っていた。トラワは其中で、「^[マルサス]彼は、商品価格が生産費によって規制されないことを何とか証明しようとしていますが、この問題における彼の推論形式からしてもその点を認めていると思われます」と見解を述べていた（*ibid.*: 201/訳227）。リカードからの返信は、彼が当地に滞在して1週間以上を経た後だった。ギャトコムから移動しブライトンの「海風」（*ibid.*: 213/訳241）を浴びながら優雅に過ごしていたリカードとは裏腹に、その間のトラワは、ある「子供じみた芸当」のためにソファから移動できずにいた。畑の柵に腰かけていた彼は、「年甲斐もなく」飛び降り、ひざを脱臼していたのである（*ibid.*: 217/訳246）。歩行困難な彼のもとに届いた手紙には、こう書かれていた。

価格は究極的には生産費によって規制されるという私の学説に関する^[マルサス]彼の言い分についてのあなたの考察に満足しております。自然価格の定義そのものからして、それは専ら生産費に依存しているのであって、需給とは何の関係もないのです。生

産者の報酬が保証されるように商品が生産されうるための条件は、需要〔量〕が生産量の5倍になったとしても、同一にとどまるでしょう。そのような需要が市場価格に及ぼす効果については、私たち全員が認めています。(ibid.: 207/訳 234)

リカードがここで述べているのは国内価格についての理論である。生産要素の移動が完了する長期において、国内での競争財の自然価格はその生産費によって決まる。生産要素の移動が完了しえない短期であれば、国内での当該財の市場価格はその需給に依存して定まる。このようなリカード理論をマルサスが忠実に説明することはなかった。しかも彼は、相対価値変動の主要因が投下労働量であるというリカードの主張を、商品価値の水準そのものが専らその投下労働量によって決定されるという命題に読み替えてしまったのである(Malthus 1820: 94-95/訳・上 137; 久松 2022 a: 167-68)。

ブライトン滞在中にマルサスの著書を注意深く再読したリカードは、初めて読んだ時以上の不満を感じ、「誤りを含まない頁はほとんどない」と不快感を露わにしている(Ricardo 1951-73, VIII: 215/訳 243)。こうしてミル直伝の傍注と同じような形で、評注は次々と書き記されていった。リカードから、「この本で扱われている主題に関して誤解と思われるものを含む全段落に答えようものならば、彼の本よりも分厚い本を書かなければならないでしょう」(ibid.: 212/訳 239)と告げられたミルは、「マルサス評注」完成時の助言を買って出た(ibid.: 292/訳 328-29)。

ブライトンを離れた後もリカードは「マルサス評注」の執筆に勤しんだ。それが完成したのは1820年の11月中旬と推察される。本稿での考察に関連する論点をマルサスの著書とリカードの草稿から抽出するとすれば、それは次の問答である。

マルサスは、「外国市場で諸商品の価格を定めるものは何であるとか」と問い、短期的にも長期的にも「需給」であると自答している(Malthus 1820: 330/訳・下 131)。この問いに対して、リカードは「外国での生産費」と回答した(Ricardo 1951-73, II: 291/訳 371)。つまりリカードによれば、国際貿易において自国が財を輸出する際の取引価格は、相手国市場で成立する生産費ないし自然価格であるというのである。

世界価格が需給ではなく生産費によって決まるというここでの明言は、もう1つの議論を喚起する。それは、「一国の諸商品の相対価値を定めるのと同じ法則は、2国以上の国々の間で交換される諸商品の相対価値を定めない」(ibid., I: 133/訳 156)というリカードの有名な命題をどう解釈するかという問題である。ジョン・ミルらに代表される解釈では、国内相対価値には生産費説ないし労働価値説が、国際相対価値には需給説ないし相互需要説がそれぞれ適用されるというものである。現代のテキストブックでも概ねこの解釈が通用している。トレンズによるリカード解釈がその嚆矢であると考えられるが(久松 2016 b: 60-62; ibid. 2022 a: 166)、上述のリカード本人の証言を見る限り、

現代的な解釈が真実であるとは思えない。

生産要素の国際間移動は原則不可能であるにもかかわらず、ある国の輸出財の取引価格も相手国内の生産費ないし自然価格の水準で成立する。この国際価値理論は確かに、自由な要素移動が許されて初めて自然価格が成立しうると説く、国内価値理論とは異なっている。このことが両理論の決定法則の違いとなっているかどうかは、ここでは問題としない。というのも、貨幣で測った国内価格や世界価格を問題にするならば、国家間で貨幣価値が異なる限り、国内外の価値決定法則に差異が発生することもあるからだ（田淵・久松 2018: 23-25）。しかし、世界価格が需給で決まる水準ではなく一方の国内の生産費で理解されていたという点は、ぬれぎぬ問題の再考における重要事項であることに変わりない。

さて、リカードは「マルサス評注」の完成を、ミル（11月16日付；Ricardo 1951-73, VIII: 296／訳 333）、マカロック（23日付；*ibid.*: 297-98／訳 335）、マルサス（24日付；*ibid.*: 301／訳 339）、トラワ（26日付；*ibid.*: 304-305／訳 343）に知らせた。リカードの予想では、その原稿の分量は製本すれば150頁ほどの厚さになるものだったが、彼自身はその出版には前向きではなかった（*ibid.*: 305／訳 343）。

知らせを受けて最も早く閲覧希望の返事（27日付）を出したのはマルサスである（*ibid.*: 308／訳 348）。すでに自著の第2版の出版を企図していた彼は、その改訂作業の前に論敵の意見を知っておきたかったのである。彼は同年のクリスマス前にギヤトコムのリカード邸に立ち寄り、「マルサス評注」を閲覧する約束を取りつけた。

一足遅れて閲覧希望を出したのはマカロックである（28日付；*ibid.*: 312／訳 352）。リカードは、ギヤトコムの自宅でマルサスに草稿を見せたのちに、それを送ることをマカロックに約束した。リカードは、マルサスがギヤトコムを訪れるのは12月9～11日頃と予想していたが、マルサスは、病気に罹った彼の姉妹のひとりの付き添いのために、リカード邸への訪問を急遽延期せざるをえない状況になった³⁶。その訪問日が不透明となったため、リカードは草稿をロンドンへと送り、彼の事務弁護士トーマス・クロスを通じてエディンバラのマカロック邸へと小包を発送した。クロスは12月19日付の書簡で小包の発送をリカードに伝えている（*ibid.*: 318-19／訳 360）。マカロックは、25日付の礼状において、草稿にさっと目を通したこと、数日後の暇な時間を利用して草稿を

36 『経済学原理』第2版の出版は遅れ、彼の死後（1836年）になってようやく日の目を見た。

37 リカードは、1820年12月4日月曜日付のマカロック宛書簡で、「マルサス氏がいつ見えるかはわかりませんが、たぶん今週末か来週頭になるでしょう」（Ricardo 1951-73, VIII: 314-15／訳 355）と述べている。

38 彼女には当初、マルサスの兄シデナム（Sydenham, 1754-1821）が付き添っていたが、息子の用事により、マルサスが代わりを務めることになった（Ricardo 1951-73, VIII: 318／訳 358-59）。姉妹のひとりとは、マルサスの未婚の姉メアリー・キャサリン・シャーロット（Mary Catherine Charlotte, 1764-1821；橋本 1987: 7-8）のことではないだろうか。

熟読することをリカードに伝えている (*ibid.*: 325/訳 367)。こうして、1820~21年の年末年始に「マルサス評注」を読み、その最初の読者となったマカロックは、1月22日付の書簡で感想を述べている。彼が最も満足したのは、「蓄積と機械の改良とに関する」リカードの所見であった (*ibid.*: 338/訳 382)。一方で、リカードが「価値について述べているもの」は、マカロックによって「評注で最も評価できない部分」とみなされた (*ibid.*: 339/訳 382-83)。労働価値説の純然たる支持者マカロックが、厳密な意味での労働価値説をきっぱり切り捨てたりカードに満足できなかったとしても何ら不思議ではない (久松 2022 a)。この不満がマカロックをして「マルサス評注」の公表に反対せしめる主要因だったとも考えられる。彼がその出版に反対した「その他の」理由としては、「マルサス評注」が「あまりにも論争的である」こと、「冗長かつ不必要な繰り返し」が多いことが挙げられている。マカロックは言う。「当代随一の経済学者は、もう1人の経済学者が犯したと思える誤りのひとつひとつに論駁を書いて時間を浪費するのではなく、この科学の根幹に関わる大原理について彼を正すことだけをやればよいのです」(Ricardo 1951-73, VIII: 340/訳 384)。評注の作成と閲覧を願い出しておきながら、マカロックのこの感想はあんまりである。

リカードのもとには、マカロックへと小包が送られる前の1820年12月11日付でトラワから書簡が届いていた。それは、「マルサス評注」の閲覧を切望する手紙であったが、その中でトラワは、評注を『原理』の新版の付録として出版する方法を提言している (*ibid.*: 320-22/訳 362-63)。トラワの推奨した形態は、リカードが『原理』初版に際して採用しようと考えていたものと同じであった。だがリカードは、その方法を「ミルの強い説得」によって断念していた。1821年1月中旬時点ではマカロックの手元にあった「マルサス評注」は、マルサスに続いてトラワによって閲覧されるが、それは数か月以上後のことだった。リカードの返信(1月14日付)では、草稿の行く末が予想されている。「ミルとマカロックとマルサスとあなたとにあの私の評注を見てもらい、ご意見を聞かせてもらえれば、その処分の仕方についてどう決めればよいかもわかるでしょう。おそらくは、評注を委ねる適当な場所は火の中ということになるでしょう」(*ibid.*: 333/訳 376)。

リカードは、マカロックへの草稿送付後間もなくして、ギャトコム39の自宅でマルサスの訪問を受けた。彼はそこに「数日間」滞在した。その際、2人は討論を交わし、「いくつかの点については以前よりさらによく相互の異論を理解し合った」が、なお両者の経済学的知見における溝が埋まることはなかった。リカードは、草稿をマルサスに見せ

39 1821年4月25日時点では、「マルサス評注」はマルサスが持っていたようである (Ricardo 1951-73, VIII: 373/訳 420)。また、トラワの6月24日付のリカード宛書簡には、その翌日の馬車便で「マルサス評注」がリカードのもとへと返却される旨の知らせが記されている (*ibid.*: 393/訳 443)。これらから、トラワが「マルサス評注」を読んだのは1821年5~6月頃であったと推測される。

るために、1821年1月21～27日以内での返却をマカロックに願い出た（*ibid.*: 336／訳 379-80）。草稿はおそらくその間に返却され、すぐにマルサスへ送られたものと思われる⁴⁰。マルサスはかなり長い期間草稿を手元においていたようで、リカードは、「それは彼^[マルサス]に少しも感銘を与えなかったのではないかと落胆気味だった。もっとも、彼らの往復書簡からマルサスの真意を探ることは不可能であるが。

さて、ミルについてはどうか。彼が「これを実際に見た日時については記録がない」が、スラッフアによれば、「ある段階でミルが評注を読んだことは、…原稿に彼の筆跡による走書きがあることから明らかである——とはいえ、この走書きはリカードの死後になされた可能性もある」（*ibid.*: xi-xii／訳 xviii-xix）という。鉛筆書きのこのメモは4つの短文であるが、そのひとつにはこう書かれている。「372頁⁴¹：外国貿易は価値を増大させない」（*ibid.*: xvi／訳 xxiv）。この走書きに相当するリカードの注釈には、輸出される帽子が貿易相手国フランスの自然価格で取引される例がある（*ibid.*: 402-403／訳 511-13）。つまり、この走書きが物語っていることは、「植民地論」以後のミルは、ある国が相手国の自然価格で貿易するというリカードの考えに気づいていたということである。ミルの閲覧年月日が不明であるため、これ以上の考察は困難だが、「マルサス評注」が彼の貿易論再考に何らかの影響を与えたと考える理由は存在していたのである。

1821年の暮れ、マカロックは、「マルサス評注」が「利潤を規制する諸法則およびその他の多くの主題を論ずる際に大きな有用性を持つだろう」とその重要性を考え直し、再度の貸与をリカードに願い出た（12月23日付；*ibid.* IX: 135／訳 149）。リカードはそれを快諾した（*ibid.*: 138／訳 153）。ギャトコムからロンドンを経由してエディンバラへと運ばれた「マルサス評注」は、丁重な管理下でマカロックによって再読されたことであろう。その有効性はマカロックによって容認されることになったとはいえ、結局のところ、彼の以前の意見が決め手となり、リカードはその公表については「当分の間」差し控えることを決意した（*ibid.* VIII: 342／訳 387）。それが実際に出版されたのは彼の死後1世紀以上後のことだった。「マルサス評注」を委ねる場所が火の中とならなかったことは、古典派経済学研究にとってきわめて幸いなことであった。

40 1821年3月2日付のトラワ宛書簡に、「マルサス評注」は「ここ5週間ばかり」マルサスの手元にあると記されている（Ricardo 1951-73, VIII: 349／訳 394）。

41 スラッフアによると、これは Ricardo（1951-73, II: 402／訳 511）に該当するという。

42 リカードの死後、マカロックは「マルサス評注」の公表に前向きな姿勢を見せた（1825年）ことがあり、その後（1846年）、再度その出版に否定的な態度を示した（久松 2022 a: 168-69）。この奇妙な事実をどう解釈すればよいかは容易ではない。考えられる1つの解釈としては、マカロックは、自身の希望により1821年に再度閲覧したことで彼の最初の感想を一度は翻したというものである。しかしながら、真相は不明である。

VI ミル『綱要』

リカードが「マルサス評注」をまだ仕上げていなかった時分のことである。1820年夏からしばらくの間、ミルはギャトコムに滞在していた。彼は、初学者向けの「経済学に関する通俗的な本を書く計画」を練っていた。それは、自分が正しいと思う経済学の諸原理を抽出し、それらを初学者でも容易く理解できるように構想された解説書で、論争的な書物を意図したものではなかった (*ibid.*: 229/訳 258)。

1820年9月4日付の書簡で、リカードはミルの計画をマルサスに伝えた。マルサスの意見は、ミルが経済学書を出すことには賛成だが、「入門的概説」書の作成は「2~3年後にすべき」というものだった (25日付; *ibid.*: 262/訳 294)。リカードはミルに対して、入門書は「論争点が解決されるまでは書かれるべきではない」というマルサスの考えを伝える一方で、それではいつまでたっても入門書が現れない可能性があるとして暗々裏に計画の実行を促した (10月14日付; *ibid.*: 283/訳 318)。

「知識の普及は最も重要な仕事である」という信念に従い、ミルは自宅にこもって「経済学の教科書」を書き進めた。12月28日時点で、彼は消費論以外のすべての経済問題の執筆を終えていた (*ibid.*: 327/訳 369-70)。リカードはその進捗状況に満足し、この教科書によって経済学が「正しい基礎の上に」確立されることを確信した (*ibid.*: 331/訳 373)。

トラワもまた、リカードとともに、この出版を待ちわびていた者のひとりである (*ibid.*: 362/訳 408)。リカードは、1821年4月21日付のトラワ宛書簡で、「現在理解されている範囲の経済学のあらゆる基本原理に明瞭な説明を与えること」がミルの教科書の「目的」であることを知らせると同時に、「たぶん1~2か月もすれば彼の本は出版されるでしょう」と、出版時期を予想する言葉を残している (*ibid.*: 368/訳 415)。同月25日付のリカードのマカロック宛書簡には、「ミルの経済学に関する本はほとんど完成した」 (*ibid.*: 375/訳 421) とあるが、それから2か月経っても、その出版はなかった。6月24日付のリカード宛書簡で、トラワは「ミル氏の本」を「待ちかねています」と述べている (*ibid.*: 395/訳 445)。数か月後、新聞広告で出版日をチェックしていた彼は不満を隠せなかった。「ミルの書物はいつ出るのでしょうか。新聞紙上にもそれについての広告が見当たりません」 (9月13日付; *ibid.* IX: 69/訳 77)。リカードは、「なぜミルの本が出ないのかわかりませんが、彼はそれを完成させたと思います」と返信した (10月4日付; *ibid.*: 87/訳 97)。印刷開始を喜びリカードの様子をようやく確認できるのは、それから10日後のミル宛書簡においてである (*ibid.*: 103/訳 114)。

こうして出版の運びとなった教科書が『綱要』である。ミルがその1冊をリカードに

献呈できたのは11月末のことだった。ミルは、「期待が運悪く外れることがなければ、そのうちに第2版を要求されるかもしれません（初日に350部の申し込みがありました、つまり書店に売りましたから）」とリカードに述べ、後続版の公刊もすでに視野に入れていた（11月30日付；*ibid.* IX: 114／訳126-27）。後続版は出版されたが、第2版が上梓されたのはリカード死後の1824年であり、ぬれぎぬ問題と深く関係する第3版が公刊されたのは、そのさらに2年後のことであった。

『綱要』出版計画の発端は、「その〔リカードの大著〕で論じられた〕諸学説を初学者向きに講じる解説書がまだなかった」1819年に、ミルが息子に対して行った経済学教育にあった。ミルは、「散歩をしながらの授業という、ある種の講義によって」、経済学を教え始めた。リカード経済学が主題ごとに「決まった量」に分割され、毎日の授業では1つの主題が解説された（Mill 1981: 31／訳53）。ミルが授業前にリカードの『原理』を注意深く再読していたであろうことは容易に想像がつく。だとすれば、「マルサス評注」閲覧以前のこの時点でミルはすでに、一方の国の自然価格で貿易されるという考えがリカードの『原理』の中にあることに気づいていた可能性がある。

解説の翌日にジョン・ミルは、前日の授業内容をレポートにまとめ、それを父親に提出し、入念なチェックを受けた。息子は、それが「明快かつ正確で、ほぼ完成した状態になるまで」、すなわちその内容が父親流のリカード経済学に符合し、しかもその文体が父親の合意を得るまで、何度も書き直しを強要されたのである。この時点では、ジョン・ミルはリカードの『原理』をまだ読んでいなかった。「この後」、つまり父の講義によって「この科学を一通り学んだ」のちに、彼は「リカード〔の『原理』〕を読んだのである」。

こうして父親流のリカード学説を徹頭徹尾たたき込まれた13歳のジョン・ミルであったが、彼がそれを正しいものと信じていたかどうかは不明である。ともあれ父ミルが、息子のレポートを参考にして、リカード学説の初学者向け解説書『綱要』を完成させたのは確かである。「⁴³私^{〔ジョン・ミル〕}が毎日提出した報告書からはこの科学の概要書ができ上がり、それは父がのちに『経済学綱要』を執筆する際のメモとして役立ったのである」（*ibid.*）。息子による執筆と自らのチェックとを繰り返して作られた日々のレポートが出

43 1822年のジョン・ミルが父ミルから依頼された労働価値説の弁護を引き受けていたことは知られている（久松2007: 37, 45）。だが、彼が父親の経済学を無条件に信奉していたかどうかは疑問である。夕刊紙『トラヴェラー』の所有者兼執筆者トレンズによるミル『綱要』の労働価値説への批判に対して、ジョン・ミルは当紙への第1の投書において、「まずもって、もし私がミル氏の交換価値に関する章を正しく理解しているとすれば、価値について彼が何かしらの理論——少なくとも、この主題に関するリカード氏の諸学説に適用する際の「理論」という用語の意味では——を持っているとはとても言えません」（Mill and Torrens 1936: 15）という発言から反批判を始めている。また第2の投書の冒頭部分からは、父から息子への労働価値説の刷り込みが感じられなくもない。「しかし、もし私が前々からミル氏の結論の真理を確信していたとしても、その結論に反対して最も有能な反対者たちがなした論拠の脆弱さによって、私の確信はさらに強まったと言わせて下さい」（*ibid.*: 21）。

揃った時、それは、傍注の技法と同じ役目を果たしたであろう。1度に多くのレポートを並べて眺めることによって比較優位説の各例解において貿易利益の統一的な説明——その正否は別として——が与えられたのも、この時だったと考えられる。

講義後にジョン・ミルはフランスに滞在し、その間に父ミルは『綱要』の執筆を進めた。帰国した息子は父から『綱要』の完成原稿に傍注を付す仕事を課された (*ibid.*: 65/訳 117)。ミルが息子筆の傍注を一望して出版間近の原稿にどの程度の加筆修正をしたかはわからない。だが3つすべての比較優位モデル(久松 2022 b)が、この段階で、この短期間のうちに、統一的に書き換えられたと考えるのは現実的ではない。繰り返しておくが、『綱要』では、以前の「植民地論」とは違って、比較優位説のどの数値例においても、ある国は相手国の比較生産費で貿易するという条件で貿易利益の発生が論じられた。しかしこの交易条件では、貿易利益の二重独占という理論的矛盾に陥る可能性がある。この時点のミル父子はまだこの誤謬に気づいてはいなかったのである。

さて、『綱要』の当初原稿の執筆と最終校正は15歳のジョン・ミルによってなされたという説がある。これは Thweatt (1987) による解釈であるが、彼はその解釈から次のような推測を引き出した。『綱要』の草稿を最初に作成したのは、経済学を習い始めて間もない13歳の息子であって、それに父の手が加えられることになった。初版出版直前に原稿の最終校正を行ったのは息子であったが、15歳の彼には、貿易利益の分割について13歳の自分が犯していた誤りを見つけることはできなかった。本書はいわば父子の共著であったが、貿易利益に関する部分の筆頭著者は父ではなく息子であった (*ibid.*: 36-38)。本節の最後に、1つのエピソードを提示してこれについて簡単に検討しておこう。

確かにジョン・ミルは、父親の論調で文章を綴る技術を持っていた。哲学的急進派の機関誌『ウェストミンスター・レビュー』の創刊号(1824年)に掲載された父ミル執筆の論文の続編について、ジョン・ミルは『自伝』の脚注に次のように書いている。「この論文の『[ウェストミンスター・] レビュー』第2号に掲載された続編は、父の指導の下で私が書いたものであるが、それは、(作文の練習としては、自分がかつて書いたどの文章よりも私にとっては有益だったが、それ以外は)ほとんどあるいはまったく価値のないものだった」(Mill 1981: 95/訳 151-52)。父が書いた論文の続編は当時17歳⁴⁴のジョン・ミルによって書かれたものだったが、読者の多くは最初の論文と続編とが同一人物による執筆であると信じて疑わなかった (*ibid.*: 96/訳 179)。1853~54年に書かれたジョン・ミル『自伝』の(最終原稿前の)初期草稿では、問題の脚注部分についてこう記されていた。

44 当時のジョン・ミルは「満18歳の誕生日を迎える直前であった」(山下 1997: 193)。

それを書いたのも訂正したのも私自身であって、他の誰かが書いたり訂正したりした箇所はまったくない。しかしその原稿は、父の指導下で私自身が信じられない回数
の推敲を重ねたものである。父は、原稿を少しずつ何度も私につき返し、より多
くの良い考えを取り入れたり、より明確に表現したりするために、部分的な修正や
撤回を繰り返し、私にそれらの書き直しをさせたのである。ほとんどすべての文章
が多大な苦痛と努力によって十数回ほど書き直したものだと思った。この論文自
体に何か価値があるものではなかったが、私にとってそれは、作文の練習としては
非常に有益だった。（*ibid.*: 97-98／訳 179）

まもなく18歳になろうとしていたジョン・ミルにとっても、父の意に沿う論文1本
を仕上げるには多大な苦痛と努力が必要だった。にもかかわらず、15歳の彼が父親の
『綱要』の最終校正まで任されたというのはかなり苦しい解釈である。そもそも、父の
意に沿う内容と形に仕上がるまで書き直しを強要された一連のレポートが『綱要』の草
稿であったとしても、それによってその主要執筆者はジョン・ミルであると言えるだろ
うか。弁護士の文章は、秘書によってタイピングされようとも、弁護士本人のものであ
る。ともあれ、給料を払ってでも誰かに代筆させるほうが有益であるという理論の実用
性に懐疑的だった父親は、財布の中身が足りないからという理由で、息子が無償で働か
せ、自らの労働を節約した——かくも滑稽な作り話だけは想像したくないものである。

Ⅶ エピローグ

なぜリカードに無実の罪が着せられてしまったのかを、Ⅲ～Ⅵを整理した上で考えて
みよう。

1815年、リカードはミルの指導下で『原理』を書く決心をした。翌年10月、その主
要理論部分の原稿（第1弾の小包）を精読したミルは、『原理』の外国貿易の章に含ま
れる比較優位説に感銘を受けた。貿易利益の分割を含むその比較優位説と同型の数値例
は、ミルによって、『原理』初版の翌年に出版された論文「植民地論」（1818年）にお
いて展開されている。ミルは、リカードが1816年11月に送付した課税論部分の原稿
（第2弾の小包）も精読し、内容面での賛同と文章面での修正の必要性とを与えた。ス
ミス植民地貿易論批判を含む残りの原稿をミルが熟読したかどうかは、彼らの往復書簡
からは推量できない。それが他の部分ほど注意深く読まれなかったからであろうか、ミ
ル「植民地論」では、一方の国の自然価格で貿易が行われるという、リカードの最後の
草稿部分に含まれる議論は姿を見せなかった。そもそも「植民地論」は、ミルが『英領
インド史』刊行のために多忙な日々を送っていた最中にわずか2か月足らずで書いたも

のだった。多忙さゆえにリカードの著書の入念な再読も困難だったであろう彼は、草稿を読んだ時の自らの記憶を頼りにしてこの補遺を執筆したものと思われる。補遺執筆時のミルは、最初の草稿部分に含まれる比較優位モデルと最後の草稿部分に含まれる論点とを同一の土俵上で突き合わせることはなかったのである。

1819年、ミルは息子ジョン・ミルに毎日の散歩の傍らリカード経済学を講じた。この時ミルがリカードの『原理』を丹念に再読した可能性は十分にある。13歳のジョン・ミルは教わったものをレポートにまとめ、父ミルの合意を得るまで書き直しと再提出を強いられた。そのレポートはミル『綱要』の作成に役立った。ミルは、息子へのこの講義の過程で、ある国が相手国の自然価格で貿易するというリカードの主張の存在に気づいたものと思われる。彼がその考えに注目していたことは、リカード「マルサス評注」になされた彼の筆跡によるメモから知ることができる。ミルによるその閲覧時期が『綱要』完成前であった可能性もあるが、現在利用可能な史料からは残念ながらそれを特定することはできない。

ジョン・ミルが自分自身でリカード『原理』を読んだのは、父から我流のリカード経済学を仕込まれた後のことだった。息子のフランス滞在中に、ミルは『綱要』の執筆を進めた。帰国したジョン・ミルは父の『綱要』の完成原稿に傍注を付した。ミルがその傍注を参考にして出版間近の原稿にどの程度の加筆修正をしたかはわからないが、比較優位説の数値例すべてが一方の国の国内価格で貿易するモデルにこの段階で初めて書き換えられたとみるのは現実的ではない。とはいえ、15歳のジョン・ミルが、そのようなケースでは貿易利益の二重独占が発生する可能性があることを見抜けなかったのは事実である。リカードが別個に提起した2つの議論、すなわち一方の国の国内価格での貿易と比較優位の原理に基づく貿易特化という2つの議論を結び付けたのは、父ミルである。畢竟、父によるこの安易な連結とモデルの変型が息子ジョン・ミルの思い込みへと繋がったと考えられる。貿易利益の二重独占という誤読は、まさしく父ミルのリカード解釈によって生じた過失であり、リカードにとっては冤罪であった。だが、リカードが彼の2国2財の数値例において4つの数字の本当の意味を言明せず、しかも交易条件を所与としておいて、それがいかにして決定されるのかを論じなかったのは、読者には不親切であった。彼には、有識者以外にも理解しやすいように彼自身の考えを書く技能の練習がなお不足していたようである。

さて、本稿は、2022年に同志社大学商学部が創設100周年を迎えることを記念して書かれたものである。本年はまたリカード生誕250周年の記念すべき年でもある。理論と史料で歴史の真相に迫ろうというこの試みが、リカードを含む古典派の貿易理論史研究に微力を添えることができたならば幸いである。最後に、本研究に深く関わってきた植民地について、2人の古典派経済学者の言説に触れ、本稿を終えることにしたい。

1876年11月29日、同志社英学校は創立1周年の記念すべき日を迎えた。経済学の古典中の古典『国富論』出版100周年にあたるこの年は、まさにこの新しい科学にとっても記念すべき年であった。アメリカ独立宣言と同年に出版されたこの著書は、次のような有名な言葉で締めくくられている。

1世紀以上にわたって、イギリスの支配者たちは、大西洋の対岸に大帝国を所有していると思わせて、国民を楽しませてきた。だが、この帝国はこれまで想像の中になかないものだった。それは帝国なんかではなく、帝国を築くための計画でしかなかった。それは、金鉱なんかではなく、金鉱を見つけるための計画でしかなかった。しかもそれは、これまで費用を要してきたし、今後も費用がかかり続けるものであるし、これまでと同じように進められるならば、莫大な費用を要するだけの何の利益も見込めない計画である。なぜなら、植民地貿易の独占がもたらす結果は、…国民の大多数にとって利益ではなく、単なる損失でしかないからである。わが国の支配者たちは、自ら酔いしれ国民を酔わせてきたこの黄金の夢を、今こそ実現してみせるべきである。実現できないのであれば、まずは自分たちがその夢から覚め、国民に目を覚ますように促すべきである。計画が達成できないなら、あきらめるべきである。^{ブリテイッシュ・エンパイア}英帝国内に帝国全体を支えることに貢献しない属領地があるなら、戦時におけるその属領地の防衛費と平時における当該属領地の行政・軍事組織の維持費、これらの負担を今こそなくし、将来の展望と計画を己の身の丈に合ったものにすべきである。(Smith 1976 b: 946-47／訳4・358-59)

著者アダム・スミスは、母国財政の維持のためにアメリカ植民地の放棄をイギリスの支配者たちに訴えたのである。彼の植民地論はリカードやミルらのちの古典派論者によって全面的に批判されたわけではない。ただ、スミスがそれを論じる際に用いた一部の理論については、先述したように、彼らからの同意が得られなかっただけである。

ミル「植民地論」の結論では、植民地政策が戦争の火種とみなされ、その戦費が「従属する多数者」の負担となっていることが危惧されている。彼は「支配する少数者」の利益がつねに「従属する多数者」の犠牲の上に成り立っていることを非難し、こう述べている。「完全に専制的であり独裁的な国であればなおさらのこと、戦争は、支配する少数者の合意を得るものを多分に有しているため、支配する少数者がほとんど唯一幸せそうに見えるのは、戦争にのめり込んでいる時だけである」(Mill 1818: 32)。ミルはかねてより徹底的な戦争反対者であった。曰く、「戦争！…これこそ、国民経済の貴重な宝、国民生活の改善および国民の幸福の基盤を食い尽くす貪欲な悪魔である」(*ibid.* 1808: 119／⁴⁵訳138)。

もしも今世において歴史に学ぶこともなければ古典を顧みることもない愚かな支配者が存在しようものならば、18世紀のかの偉大な哲学者の言説を彼らに煎じて飲ませたいものである。

エピロスの王に向かって寵臣が言った言葉は、人生でありふれた境遇にいるすべての人に当てはまると思われる。王は寵臣に対し、自ら目論んだ征服計画を順序立てて話した。ようやく最後の征服計画に話がおよんだ時、寵臣は尋ねた。「ところで陛下は、その後といったい何をなさるおつもりでしょうか」。王は答えた。「友とくつろぎ、酒を酌み交わしながら楽しみたいと思うておる」。寵臣曰く、「陛下が今そんなことを妨げるものは何かございますか」。われわれの馬鹿げた空想が思い描く最も輝かしい栄華の中にあっても、われわれに真の幸福をもたらす快樂は、現在の境遇で得られる快樂、すなわちささやかではあるがつねに手近にあって確実に手に入る快樂とほとんどいつも同じなのである。(Smith 1976 a: 150/訳 335)

参考文献

- [Anonymous.] 1814. *Considerations on the Importation of Foreign Corn; Arising out of the Proceedings, at a Meeting of the Heritors of Fifeshire, Proposing to Petition the Legislature for Further Restriction, as Published in the Courier Newspaper of 10th December 1813*, London: [Printed for the Author].
- Chipman, J. 1965. "A Survey of the Theory of International Trade: Part 2, The Neo-Classical Theory." *Econometrica*, 33(4): 685-760.
- De Vivo, G. 2000. "Introduction [to *External Corn Trade*]." In *Collected Works of Robert Torrens*, 8 volumes, edited and introduced by G. de Vivo, Bristol: Thoemmes Press.
- . 2010. "Robert Torrens as a Neglected Economist." In *English, Irish and Subversives among the Dismal Scientists*, edited by N. Allington and N. W. Thompson, Bingley: Emerald Publishing: 89-110.
- . (ed.) 2014. *Catalogue of the Library of Piero Sraffa. With an Essay by L. L. Pasinetti*. Milano: Fondazione Raffaele Mattioli.
- Ellis, W. 1825. "Exportation of Machinery." *The Westminster Review*, April: 386-94.
- Faccarello, G. 2022. "I profess to have made no discovery": James Mill on Comparative Advantage." *European Journal of the History of Economic Thought*, 29(1): 61-81.
- Feenstra, R. C. 2016. *Advanced International Trade: Theory and Evidence. Second Edition*. Princeton: Princeton University Press. (伊藤元重 [監訳]・下井直毅 [訳]. 2021. 『上級国際貿易 [理論と実証]』日本評論社)
- Gehrke, C. 2015. "Ricardo's Discovery of Comparative Advantage Revisited: A Critique of Raffin's Account." *The European Journal of the History of Economic Thought*, 22(5): 791-817.

45 マルサスはかつて『食糧高価論』(Malthus 1800: 10/訳 152)の中で、貧民が穀物を買おうとするたびその価格が騰貴する様をギリシア神話の王タンタロスで喩えたが、ミルも戦争と平和の反復を同様の神話で描写している。「一般に、戦費をどうしても調達できなくなるほど国が疲弊して初めて、戦争は終わりを告げる。平和の恩恵に再び浴すると、その国は徐々に立ち直る。だが一般に、その国がかつての繁栄を取り戻したかと思えば、またもや戦争の惨禍に見舞われ、前に来た道を後戻りすることを余儀なくされるのである。…社会の繁栄は…まるでタンタロスの水のように、ただ唇に近づくことしか許されず、近づくとすぐに唇からはじき飛ばされてしまうのである」(Mill 1808: 119-20/訳 138-39)。

- Grančay, M. and N. Grančay. 2015. *Considerations on the Importation of Foreign Corn* (1814) and the Principle of Comparative Advantage. *History of Economics Review*, 61 (Winter) : 69-77.
- Hisamatsu, T. 2019. "Thomas Robert Malthus and His Unrealized Edition of Adam Smith's *The Wealth of Nations*." *The Adam Smith Review*, 11: 281-296.
- and M. Fukushima. 2021. "Sir Edward West and the Principle of Diminishing Returns: Its Application to the 1815 Corn Law Question." *The History of Economic Thought* (『経済学史研究』), 62(2) : 75-80.
- Hume, D. 1752. *Political Discourses*. Edinburgh: Fleming.
- Krugman, P. R., M. Obstfeld and M. J. Melitz. 2018. *International Economics: Theory and Policy, Eleventh edition*. Boston: Pearson.
- Malthus, T. R. 1800. *An Investigation of the Cause of the Present High Price of Provisions*. London: Johnson.
 (久松太郎・中澤信彦・王 量亮 [訳]. 2022. 「マルサス『食糧高価論』(1800年)」『同志社商学』74(1) : 145-64)
- . 1820. *Principles of Political Economy, Considered with a View to Their Practical Application*, London: Murray. (小林時三郎 [訳]. 1968. 『経済学原理』(上下巻) 岩波文庫)
- Maneschi, A. 1998. *Comparative Advantage in International Trade: A Historical Perspective*. Cheltenham: Elgar.
- . 2004. "The True Meaning of David Ricardo's Four Magic Numbers." *Journal of International Economics*, 62(2) : 433-43.
- . 2017. "David Ricardo's Trade Theory: Anticipations and Later Development." In *Ricardo and International Trade*, edited by S. Senga, T. Tabuchi and M. Fujimoto. New York: Routledge: 33-47.
- McCulloch, J. R. 1818. "Ricardo's Political Economy." *Edinburgh Review*, 30 (June) : 59-87. (相見志郎 [訳]. 1970. 「マカロックのリカード『経済学および課税の原理』の紹介」『経済学論叢(同志社大学)』19(3) : 66-98)
- Mill, J. 1808. *Commerce Defended. An Answer to the Augments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and Others, Have Attempted to Prove that Commerce is not a Source of National Wealth*, London: C. and R. Baldwin. (岡 茂男 [訳]. 1965. 『商業擁護論』未来社)
- . 1818. "Colony." Reprint (1820 edition) from *The Supplement to the Encyclopædia Britannica*," London: Innes.
- . 1821. *Elements of Political Economy*, London: Baldwin, Cradock and Joy.
- . 1824. *Elements of Political Economy, Second Edition, Revised and Corrected*, London: Baldwin, Cradock and Joy.
- . 1826. *Elements of Political Economy, Third Edition*, London: Baldwin, Cradock and Joy. (渡邊輝雄 [訳] 1948. 『経済学綱要』春秋社)
- Mill, J. S. 1844. *Essays on Some Unsettled Questions of Political Economy*. London: Parker. (末永茂喜 [訳]. 1936. 『経済学試論集』岩波文庫)
- . 1981. *Autobiography and Literary Essays*. In *Collected Works of John Stuart Mill*, edited by J. M. Robson and J. Stillinger, Vol.I, Toronto: University of Toronto Press. (山下重一 [訳註]. 2003. 『評注ミル自伝』御茶の水書房)
- and R. Torrens. 1936. *John Stuart Mill on the Measure of Value*, edited by J. H. Hollander. Baltimore: The John Hopkins Press.
- Morrison, W. D. 1891. *Crime and Its Causes*. London: Swan Sonnenschein and Co.
- Napier, M. 1879. *Selection from the Correspondence of the Late Macvey Napier, Esq.*, edited by "his son, Macvey Napier." London: Macmillan.
- Pennington, J. 1840. *A Letter to Kirkman Finlay, Esq., on the Importation of Foreign Corn, and the Value of the Precious Metals in Different Countries. To which are Added Observations on Money, and the Foreign Exchange*. London: Simpkin, Marshall, and Co.
- Ricardo, D. 1951-73. *The Works and Correspondence of David Ricardo*, edited by P. Sraffa with the Collabora-

- tion of M. H. Dobb, 11 vols., Cambridge: Cambridge University Press. (日本語版「リカード全集」刊行委員会 [訳]. 1969-99. 『リカード全集』(全11巻) 雄松堂)
- Robin, G. D. 1964. "Pioneers in Criminology: William Douglas Morrison (1852-1943)." *Journal of Criminal Law and Criminology*, 55(1) : 48-58.
- Ruffin, R. J. 2002. "David Ricardo's Discovery of Comparative Advantage", *History of Political Economy*, 34(4) : 727-48.
- Samuelson, P. A. 1980. *Economics. Eleventh Edition*. New York: McGraw-Hill. (都留重人 [訳]. 1981. 『新版サミュエルソン経済学』(上・下) 岩波書店)
- Smith, A. 1976 a. *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie. Oxford: Clarendon Press. (村井章子・北川知子 [訳]. 2014. 『道徳感情論』日経 BP クラシックス)
- . 1976 b. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, 2 vols. Oxford: Clarendon Press. (水田洋 [監訳]・杉山忠平 [訳]. 2000-1. 『国富論』(全4巻) 岩波書店)
- Sraffa, P. 1930. "An Alleged Correction of Ricardo", *Quarterly Journal of Economics*, 44: 539-45.
- Thweatt, W. O. 1987. "James and John Mill on Comparative Advantage: Sraffa's Account Corrected." In *Trade in Transit*, edited by H. Visser and E. Schoorl, Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers: 33-43.
- Torrens 1817. "A Paper on the Means of Reducing the Poores^[sic] Rates and of Affording Effectual and Permanent Relief to the Labouring Classes, Presented to the Chairman of the Committee on the Poor Laws." *Pamphleteer*, 10(20) : 509-28.
- . 1827. *An Essay on the External Corn Trade. Fourth Edition*. London: Longman, Rees, Orme, Brown, and Green.
- Viner, J. 1937. *Studies in the Theory of International Trade*, New York: Harper and Brothers. (中澤進一 [訳]. 2010. 『国際貿易の理論』勁草書房)
- West, E. 1815. *Essay on the Application of Capital to Land, with Observations Showing the Impolicy of any Great Restriction of Corn, and that the Bounty of 1688 did not Lower the Price of It*. London: Underwood. (橋本比登志 [訳]. 1963. 『穀物価格論』未来社)
- Winch, D. 1965. *Classical Political Economy and Colonies*. London: Bell and Sons. (杉原四郎・本山美彦 [訳]. 1975. 『古典派政治経済学と植民地』未来社)
- 井上勝也. 1975. 「留岡幸助——人と思想(一)」『キリスト教社会問題研究(同志社大学)』23: 116-45.
- 倉持史朗. 2012. 「『大日本監獄協会雑誌』の書誌的研究——大日本監獄協会の組織・活動と監獄改良論を焦点として——」『天理大学学報』63(2) : 87-107.
- 田淵太一. 2006. 『貿易・貨幣・権力——国際経済学批判——』法政大学出版局.
- ・久松太郎. 2018. 「リカードはリカード・モデルを提示したのか」『国際経済』(69) : 1-31.
- 橋本比登志. 1987. 『マルサス研究序説——親子書簡・初版『人口論』を中心として——』嵯峨野書院.
- 久松太郎. 2007. 「R. トレンズの投下労働価値論批判」『経済学史研究』49(1) : 37-52.
- . 2014. 「古典派経済学者の知的交流——ロバート・トレンズの生涯とその著作」『国民経済雑誌』210(5) : 67-95.
- . 2015. 「ロバート・トレンズとマルサス人口論——1817年論文と1829年補論における理論と政策」『マルサス学会年報』(24) : 67-106.
- . 2016 a. 「デイヴィッド・リカードと「比較優位の原理」——その先駆者とその後の展開」『国民経済雑誌』214(4) : 81-99.
- . 2016 b. 「ロバート・トレンズと比較優位の原理」『国民経済雑誌』214(5) : 51-70.
- . 2022 a. 「リカード価値論再考」『同志社商学』73(5) : 141-74.
- . 2022 b. 「比較優位と貿易利益——ジェームズ・ミルとウィリアム・エリス——」『同志社商学』74(1) : 71-112.
- 藤本正富. 1992. 「J. S. ミルの相互需要説」『南山論集(南山大学大学院)』20: 43-87.

- . 2001. 「J. S. ミル『経済学原理』第3版「国際価値論」新節の意味するもの」『大阪学院大学経済論集』15(1)：69-90.
- 松本有一. 2021. 『ピエロ・スラッファ——非主流の経済学者——』関西学院大学出版会.
- 山下重一. 1997. 『ジェイムズ・ミル』研究社出版.
- 行沢健三. 1974. 「リカードゥ「比較生産費説」の原型理解と変型理解」『商学論纂（中央大学）』15(6)：25-51.
- . 1978. 「古典派貿易理論の形成——リカードゥとミル父子」行沢健三・田中真晴・平井俊彦・山口和男 [編]『社会科学の方法と歴史』ミネルヴァ書房：203-24.
- 吉信 肅. 1991. 『古典派貿易理論の展開』同文館.